
ブルースター

チェリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルースター

【Nコード】

N1032E

【作者名】

チエリ

【あらすじ】

大学時代、お互い好きだったのにその想いを口にすることができなかった二人。4年後、偶然再会した二人は・・・。短編『再会。』からの続編となるお話です。こちらの作品は先に『再会。』をご覧くださいませ。300,000HIT記念企画特別番外編をサイトにて公開中です！
<http://www.cherry-souzai.com/>

日本に帰国して3日。

「この辺もあまり変わっていないな・・・。」

俺・広瀬優二^{ひろせ ゆうじ}は、つい先日まで仕事でアメリカに行っていた。

仕事が早く終わり、まだ荷解きも完全に終わっていない

自分の部屋へと車で帰っている途中、

フロントガラス越しに見える景色が少し懐かしい。

目の前の信号が赤に変わって横断歩道の手前で止まると、
前方からこっちに向かって歩道を歩いている女性の姿が
ふっと、視界に入ってきた。

・・・ナル・・・？

いや、まさかな。

俺はその女性の姿と、昔密かに想っていた女の子の姿を重ねた。

・・・あれから、もう4年も経つのに・・・。

だけど、知らず知らずの内に俺はその女性の姿を目で追っていた。
そして段々と近づいてくるその姿に自分の目を疑った。

・・・っ!?

「ナルッ!？」

気がつくと俺は車を降りてその女性に声を掛けていた。

俺の声に少しだけピクリと反応をし、立ち止まったその女性は

ゆっくりと顔をあげた。

「広瀬先輩・・・？」

あの頃と変わらない・・・いや、少しだけ女っぽくなったナルの声。

「やっぱり・・・ナルだ。」

俺は思わず嬉しくて笑みがこぼれた。

ナルが目の前にいる・・・。

ずっと会いたかった人・・・ちあきのるみ千秋愛美が・・・。

「ホ、ホントに広瀬先輩・・・？」

ナルはまだ俺が目の前にいる事が信じられないのか

驚いた顔のままだ。

「うん！俺だよ。」

その言葉にナルはやつと笑顔を見せてくれた。

あの頃と変わらない笑顔・・・

だけど、4年前よりもずっと綺麗になっていた。

「・・・先輩っ！」

その笑顔に思わず俺が見惚れていると、いきなりナルが抱きついてきた。

「・・・えっ・・・ちょ・・・ナルッ!？」

予想外だ・・・。

パッパアーーーーッ!!!!

突然、クラクションの音が鳴り響いた。

あ・・・

車、放置したままだった。

すでに車道の信号は青に変わり、俺の車の後ろにいる車がクラクションを鳴らしていた。

「ナル、乗って。」

俺はナルの手を引き、助手席のドアを開けた。

「え・・・先輩・・・？」

「いいから、早く!」

「あ・・・はい。」

戸惑っているナルを促し、助手席に乗ったのを確認して

俺はアクセルを踏み込んだ。

「・・・あ、ところでナル・・・どこかへ向かってる途中だった?」

とりあえずナルを半ば強引に車に乗せたはいいけど・・・

何か予定があつたんじゃないかと思い直した。

「いえ、そんな事ないですよ?」

ナルはすぐにそう答えるにつこりと笑った。

それはまたラッキー。

ナルに何も予定がなかった事に俺は少しホッとした。

だって・・・せつかくこうして会えたのに、

すぐにまたさよならなんてしたくなかったから。

「じゃ、せつかくだからこのままメシでもどう?」

「はい!」

嬉しそうに返事をしたナルが俺的には少し意外だった。

「ナル、何が食べたい?」

「んー・・・先輩は?」

「こっちが聞いてんのに質問返しかよつ。」

「えー、だって特にコレってゆーのが思い浮かばないんですけどもん。」

「ははは、じゃー・・・和食は?」

「はい、全然OKです!」

「んじゃ、決まり！」

俺は瞬時に“脳内飲食店リスト”から特にお気に入りのお店をチョイスして、

ハンドルをきった。

「うわぁ・・・きれい・・・。」

目の前に並べられた料理を見るなり、彼女は感嘆の声を漏らした。

高級料亭・・・とまではいかないけど気軽に立ち寄れる値段で

わりと本格的な和食を出す店。

それでいて堅苦しくない雰囲気が入っている店にナルを連れてきた。

「なんか食べるのもつたいないですねー。」

「そんな事言って結局、全部ぺろりと食べちゃうんだろ？」

「えへへ、そうですねー。」

少し照れたように笑ったナルを見ているとまるで4年前に戻ったような気がした。

「じゃ、まずは乾杯。」

お互いグラスを傾けて“予期せぬ嬉しい再会”を祝った。

でもグラスの中身はノンアルコール・・・俺は車だし、

ナルもあまり酒は飲めないから。

・・・というワケで、ウーロン茶で乾杯した。

「ナルは相変わらず酒弱いのか？」

「さすがに大学の頃よりは強くなりましたよ？」

「じゃ、今度は飲みに行こう。」

「はい。」

ナルはにっこり笑いながら、意外とすんなり返事をした。

俺的には結構勇気を出して言った一言だったんだけどなー。

でもまあ、これで一応、次回の伏線をさりげなく張ることができた

な。

「先輩、お仕事何してるんですか？」

「一応、建築士。」

「わあー、じゃ夢が叶ったんですね！」

「とはいえ、まだ見習いだけだな。」

「それでもすごいですよー。」

俺は大学の時、建築学科だった。

将来は建築士になりたいとナルに話した事があったわけ。

ナルはそれを憶えていてくれたのか。

「ナルは？どんな仕事してるの？」

「私はフツーにOLです。」

「事務系？」

「はい、営業事務です・・・というか、営業のサポートみたいな感じですよ。」

「へえー。」

「先輩とさっきばったり会った所の近くに会社があるんですよ。」

「そうなのか？じゃ、俺の職場からも近いな。」

「えっ！？先輩もあの近くなんですか？」

「うん、あの辺に『今井建築事務所』って、あるの知らない？」

「あ、知ってます。有名な一級建築士の方の事務所ですよね？」

「うん、俺の先生。今、あそこで修行中なんだ。」

「えー！全然知らなかった・・・そんな近くにいたのに

今まで会わなかったのが不思議ですねー。」

「あー、俺は事務所に入ってすぐアメリカに行ってたからなあー。」

「アメリカ・・・？」

「うん、今井先生は世界で活躍している人だからね。つい3日前まで

俺も先生に付いてアメリカに行ってたんだよ。」

「そうだったんですかー。あ・・・だから今日、和食にしたんですね？」

ナルはにやりと笑った。

それから俺達は大学時代の思い出話に花を咲かせた。

俺とナルは学部は違っていたけれど同じ野球部にいた。

俺は小さい頃から野球が好きだったし、小学校の頃リトルリーグにも入っていた。

ナルも女の子にしては珍しく野球好きで、マネージャーとして野球部にいた。

いつも明るく笑いながら俺達部員のサポートをしてくれる彼女に
いつしか俺は惹かれていった。

だけど、どうしても想いを告げる事ができなかった・・・。

ナルとの関係を壊したくなかったから・・・。

“先輩と後輩”・・・特別な関係でもなかったけど、

なんだかんだとよく一緒に遊んだりもしていた。

二人きりになる事もなくて、いつも部員のみんなと一緒にだったけど
それでもよかった・・・ナルと一緒にいられたから。

壊れるくらいならこのままの方がいい・・・。

そして、そのまま俺は卒業、就職とほぼ同時にアメリカに行く事が
決まった。

アメリカへは最低でも3年は行く事になるだろうと言われていた俺は
彼女への想いを断ち切ることに決めた。

もし、告白してうまくいったとしても・・・いきなり3年間・・・
いや、もしかしたらそれ以上になるかもしれないけど待っていてくれ
なんて

言えなかったからだ。

「愛美、おはよう!」

次の日、朝。

駅の改札を出たところで会社の同僚・塚田智子と一緒にになった。

「おはよう。」

「昨日はちゃんと早く寝たみたいね? スッキリした顔してる。」

「そお?」

「うん、全然顔つきが違うよ。」

それはきつと先輩に会えたから。

昨夜、また今度飲みに行こうと先輩が言ってくれて、

携帯番号とメアドを教えてもらった。

それに名刺も。

寝る前、先輩に食事をご馳走になったお礼を兼ねて

おやすみなさいとメールをしたらすぐにメールが返ってきた。

そのおかげで昨日、恋人・・・もとい、元恋人の日高康成さんとあんな事があつて別れたばかりなのに私は朝からご機嫌だった。

「なんかいい事あつたの？」

「うん、まあね。」

「やっぱり？愛美はそーゆーのすぐ顔に出るからわかる。」

私、今どんな顔してんの？

会社に着いて更衣室に入ると、佐伯さんがいた。

あ・・・

佐伯千鶴。

私の１年後に入社した受付嬢の女の子だ。

「おはようございます。」

私は目一杯平静を装って笑顔で挨拶をした。

「・・・あ・・・、おはようございます。」

佐伯さんは少し小さな声で言った。

でも、私とは目を合わせようとしていない。

“罪悪感？”

二人の間にビミョーな空気が流れた・・・。

「なんかあつたの？」

佐伯さんが更衣室を出た後、智子が不思議そうな顔をしながら聞いてきた。

まあ・・・直接じゃないけどね・・・。

「ううん、別になんにも。」

私は笑って答えた。

それでも智子はどこか納得のいかない顔をしていたけれど・・・。

うちの会社は建築資材を扱っている会社で、日本でも大手企業。

私はその営業部で営業事務をしている。

事務・・・と言っても、実際には部署の中の“なんでも屋”みたいな感じ。

伝票入力や見積もり、データ管理からお茶汲みまで・・・

時には接待に借り出される事もある。

そーゆー時はだいたい“お酌係り”だけど。

ちなみに智子の彼氏・矢野純一さんも私と同じ営業部で

智子と私の元彼・康成さんは総務部。

康成さんは矢野さんと同期入社で仲もいい。

だからよく私と康成さん、智子と矢野さんの4人で

ダブルデートをしたり飲みにも行っていた。

私と康成さんが別れたって言ったら二人はなんて言うかな・・・？

部署に行くとすでに矢野さんが来ていた。

「おはよう、愛美ちゃん。」

矢野さんは今日も朝からご機嫌だ。

「おはようございます。」

「愛美ちゃん、昨日なんかいい事あったの？」

矢野さんは智子と同じ事を聞いてきた。

私、そんなに顔に出てるのかな？

「そんなににやけた顔してます？」

「んー、にやけてるって言うか・・・“いい事がありました。”って

顔に書いてある感じ。」

どんな顔・・・？

「昨日、日高とデートでもしたの？」

矢野さんは周りに聞こえないように小声で言った。

私と康成さんが付き合っている・・・もともとい・・・

付き合っていた事は社内には秘密にしていたからだ。

知っているのは矢野さんと智子だけ。

・・・と、後は佐伯さん・・・かな。

「……………」

・・・ていうか別れました。

「ラブラブだねっ。」

私が何も答えないでいると、凶星だと思ったのか

矢野さんはにやりと笑った。

ホントはその逆なんですよぉー？

二人にもそのうちちゃんと言わないとな・・・

いろいろ気も使ってくれてたし。

お昼休み、いつものように屋上に行って青い空の下で

智子と一緒にランチタイム。

「ねえ、愛美、日高さんなんかあったの？」

お弁当を食べ終わった頃、智子が突然不思議そうに聞いてきた。

「なんで？」

「なんか朝からずっと様子がおかしいのよねえ・・・。」

「どんな風に？」

「んー、考え事してるみたいな感じだったり、凡ミス連発したり・・・

。。
」

「ふーん。
」

それは確かにおかしい。

康成さんは社内でも“仕事ができる人”で通っている。

だから普段なら絶対に凡ミスなんて有り得ないし、

仕事中、考え事なんて事もしない。

子供の名前でも考えてるんじゃない？

「ふーん。
”て、冷たいわねー？”
」

だって、私にはもう関係ないもん……。。

「ケンカでもしたの？」

ケンカどころか別れたんだけどね・・・。

「・・・で、それなら愛美が朝から浮かれてないしねー？」

浮かれてって・・・

まあ・・・実際、浮かれてるんだろうけど。

「・・・智子・・・あのね・・・。」

「ん？」

「私・・・康成さんと別れたの。」

「・・・えっ!？」

智子は私の口から思ってみなかつた言葉が出たからか
反応するのに少し間があった。

「別れたって……なんでよ……？」

「まあ……いろいろと？」

私は曖昧に答えた。

お昼休みの今はゆっくり話せないから……と言つのもあるけれど、
すんなり別れたとは言え二股かけられてた事実と、そして子供が
来たことで

捨てられたという事実を昨日の今日で口にするのはちょっと辛い。

「今度ゆっくり話すよ。」

「……うん。」

私があまり話したがっていいのを察してか、

智子はそれ以上何も聞いてこなかった。

「せっかくの休みの日なのに悪いな。」

「いえいえ。」

週末の土曜日。

私は今、先輩の部屋に來ている。

日本に帰つてきてから一週間・・・荷解きがまだ終わっていないらしく、

今日はそのお手伝い。

・・・なんだけど・・・

來て見てびっくり・・・

何がつて・・・

だって・・・

あの夢の中と同じマンションに住んでたから・・・っ！

「・・・先輩、ここって広さどれくらいなんですか？」

「4LDK。」

「4・・・！？」

広いと思ってたけど・・・やっぱり広い・・・

「・・・一人暮らし・・・ですね？」

「そーだけど？」

先輩はしれっとした顔で言っただけど・・・

一人暮らしの広さじゃないでしょ・・・っ！

「ホントは2LDKでよかったんだけど、会社から近いトコで考えたらココになったんだよ。」

まあ、大は小を兼ねるってコトで、広くて困る事はないしね。」

「はぁ・・・。」

それにしたって・・・

「あれ・・・？、なんか・・・引いてる？」

ちよつと呆れ顔の私を見て先輩は苦笑いをした。

お昼過ぎ、まだキッチンがまともに使える状態じゃなかったから、

外で昼食を済ませてその帰りに収納ボックスや足りない食器類を揃えるためショッピングモールへ寄った。

「先輩、こんなに買うものあるんですか？」

先輩が書いた買い物リストを見てまたびっくり。

調理器具はおろか、食器類もほとんど買わないといけなかったから。

「・・・一体、どうやって生きてたんですか？」

調理器具も食器もない生活って・・・。

「いや・・・アリメカにいた時はほとんど外食だったし、

忙しくて自炊なんてとてもできなかったんだよ。」

「それでよく太りませんでしたね？」

「忙しかったおかげで強制ダイエットになってたみたい。」

「あはは、なんですかそれー？」

そんなに忙しかったのかな？

「けど、これからは仕事も少し落ち着くし、自炊もしないとな。」

「先輩、料理できるんですか？」

「あっ！バカにしてるだろ？これでも結構、料理はできる方なんだぞ？」

「じゃあ、得意料理は？」

「カレー。」

「・・・無難なモノ言いましたね？」

「バレた？」

「はい、私もこの手の話題の時には必ず“カレー”って言いますから。」

「なんだ、ナルも人の事言えないんじゃないか。」

「私は“自称・三流シェフ”ですからっ。」

「それ、胸張って言う事じゃないだろっ。」

腰に手を当てて胸を張って見せた私のおでこを、

先輩は指でツンと軽く弾いた。

一通り買い物をし終えて駐車場に向かっている途中、

見覚えのあるシャツを着た男性の姿が目に入った。

前方から康成さんと佐伯さんが一緒に腕を組んで歩いてきていた。

げげ・・・っ。

こんなところで会うなんて・・・、

どこか逃げるところは・・・。

「ナル、どうした？」

急にスローダウンし、キョロキョロし始めた私を不審に思ったのか、先輩は首を傾げた。

「愛美？」

遅かった・・・。

逃げる間もなく、あっさり康成さんに見つかってしまった・・・。

「あ・・・こんにちは。」

とりあえず笑顔で言ってみたけれど、きっと引き攣っている。

佐伯さんは私の顔を見た後、隣にいる先輩を見て眉を顰めた。

康成さんもあまり顔に出てはいないけれど、私が男性という事に

ちょっと驚いたみたいだった。

私は二人が並んでいる姿を見てちょっと胸がズキリとした。

だって・・・あまりにもお似合いだったから・・・。

「へえー、千秋さんも変わり身が早いんですね？もう次の人がいるなんて。」

「・・・おい、千鶴。」

佐伯さんはどうやら先輩を新しい彼氏だと勘違いしているみたいだ。

「だって、そうじゃない？それとも・・・案外、康成さんも

二股かけられてたんじゃないの？」

・・・む。

「そんな訳ないだろ？」

否定しようとした私よりも先に口を開いたのは康成さんだった。

「愛美はそんな女じゃない。」

声は荒げてはいないものの康成さんは明らかに怒っているのがわかった。

「どうして別れた女の事なんて庇うのよ？」

康成さんが私を庇ったのが気に入らないのか

佐伯さんは不機嫌モード全開になった。

あらら・・・。

「何を勘違いしてるかは知らないけど・・・、俺はただの友達ですよ。」

今度は先輩が口を開いた。

「・・・それに、もし俺が彼氏だとしても、

その彼が言ったようにナルは二股なんかする子じゃないですから。

」

そして今度は佐伯さんに少し強い口調で言った。

「行こう。」

先輩は私に少しでも視線を向け、康成さんと佐伯さんに

「失礼。」と言い、歩き出した。

私は二人に視線を向ける事無く、先輩の後を追った。

「・・・先輩、ありがとございました。」

二人の姿が見えなくなった頃、私が庇ってくれたお礼を言うと、

先輩は黙ったまま私を見つめ、そつと手を握ってくれた。

だけどその目は怒っているみたいだった。

私にじゃなくて、あの二人に対して・・・。

先輩はそれからずっと無言だった。

・・・帰りの車の中でも。

先輩の部屋に戻って荷物整理の続きをしていると私の携帯が鳴った。

あ・・・この着メロ・・・。

康成さんからだ・・・。

そういえばまだ康成さん専用の着メロにしたままだった。

忘れてた……。

「ナル、携帯鳴ってるよ？」

電話に出ようとしない私に先輩が不思議そうに言った。

「あ……はい……。」

今さら……なんの用？

「……ナル？」

……早く切れないかな？

「・・・もしかして・・・さっきの男から？」

気がつく先輩が目の前に来ていた。

「・・・はい。」

「元彼・・・？」

先輩は珍しく直球で聞いてきた。

私は黙ったまま頷いた。

携帯は・・・まだ鳴り続けたままだ。

「ナル・・・。」

電話が切れてシン・・・と静まり返った部屋に

先輩の声だけが微かに響いた。

「・・・ナル・・・。」

先輩はもう一度、私の名前を呼ぶと大きくて暖かい手で

私の頬を包み込んだ。

そして何か言いたそうな顔をしている。

それがなんだかととても切なくて苦しそうで・・・。

「先輩・・・？」

どうして・・・そんな顔してるの？

少し長い沈黙の後、先輩は少しだけ息を吸い込んで思い切ったように口を開いた。

「・・・ナル・・・ナルはまださっきのヤツの事・・・好きなのか？」

「いえ・・・今はもう・・・そんな事ないですよ。」

さっきはちょっと動揺しちゃったけど・・・。

「そりゃ、さすがにまだ笑って康成さ・・・さっきの彼とは話せませんけど・・・。」

「・・・どうして別れたの？」

今日の先輩はなんだかヘンだ。

いつもなら絶対にこんな踏み込んだ事、聞いてこないのに・・・。

「・・・二股かけられてたんです。」

「もしかして・・・さっきいた女と？」

「・・・はい。それで・・・その子が妊娠しちゃったみたいで・・・

結局、私・・・捨てられちゃっ・・・」

私が全部言い終わらないうちに先輩は力強く私を抱きしめた。

「ごめん・・・辛い事話させて・・・。」

先輩は別れた理由を聞いたことを後悔するように言った。

私は首を横に振った。

「私・・・今は別れてよかったって思ってるんです。

彼にフラれてから、なんか一気に冷めちゃって・・・

それに、あの子の方が私よりずっとお似合いだったし・・・。」

「ナル……。」

「多分……子供ができてなくても……きっと私……。」

「そんな事ない。」

先輩は少し強い口調で言った。

「俺なら……ナルの方がいい。」

そんな事言ってくれるの……先輩だけだよ。

「俺なら……絶対にナルを選ぶ……」

その前に、そもそも……二股なんて事もしないけど。」

そうだね……先輩はそんな事しそうにないもんね。

「・・・だから・・・、俺をナルの恋人にして？」

え・・・？

私は一瞬、耳を疑った。

「大学の中からずっとナルの事が好きだった・・・

けど、それを口にしたらナルとの関係が壊れる気がして、

言えなかったんだ・・・。」

先輩も私の事を・・・？

「卒業してからもずっとナルの事が忘れられなくて・・・

今でも・・・好きだ。」

あの頃からずっと・・・？

私はすごくドキドキしていた。

康成さんに告白された時よりももっと……ずっと……。

「ナルがまだ付き合う気になれないなら……、

俺を受け入れてくれる気になるまで待つから……。」

そんな……そこまで……

気がつけば私は涙を流していた……。

「……ナル？」

先輩が少し驚いて顔を覗き込む。

「……俺じゃ……ダメ？」

ちがうよ・・・先輩。

嫌で泣いてるんじゃないよ・・・。

嬉しくて涙が溢れて声にならない私は、首を横に振るのが精一杯だった。

先輩は泣き続ける私の背中を優しくあやすように擦ってくれた。

「・・・嫌で泣いてたんじゃないんです。」

ようやく涙が止まった私は少しだけ先輩に笑って見せた。

「・・・?」

先輩はじゃあ、なんで?言った顔をしながら指で涙を拭ってくれた。

「先輩が私の事、好きだって言ってくれた事がすごく嬉しくて・・・」

私がそう言つと頬に触れていた先輩の指が微かに震えた。

「私を・・・先輩の恋人にしてくれますか・・・？」

「・・・ナル。」

先輩は驚いた顔をした。

「告白したと思ったら、告白返し？」

「はい。」

だって、私も先輩の事好きだったから。

それに・・・今でもきつと好きなんだと思う・・・

こんなにドキドキしてるから・・・。

「もうっ!」

先輩は悪戯っ子にしてやられたといった感じでギュッと私を抱きしめた。

「私も・・・大学の時、先輩の事・・・好きだったんですよ?」

「え・・・?」

「でも、言えなかったんです。」

「どうして?」

「私も先輩と同じです。先輩との関係が壊れるのが嫌だったから・・・。」

「そっか……。」

「思い切って告白すればよかったなあ……。」

「……なら、これから4年分を取り戻せばいいだろ？」

先輩はクスツと笑うと優しく私の唇にキスを落とした。

長い、長いキス……。

まるで本当に4年分のキスをするみたいに……。

週明け、月曜日。

先輩と付き合う事になって幸せの絶頂にいた私を

“とある事件”が待っていた。

週明け、月曜日の朝。

いつものように出社し、部署に向かうエレベーターの中、
康成さんに出くわした。

最悪・・・。

けどまだ二人きりじゃないだけマシか。

エレベーターの中には、私と康成さんの他に男性社員一人と
女性社員が二人いた。

「おはようございます。」

あまり顔を合わせたくないけれど、それでも一応挨拶だけはする。

「・・・おはよう。」

康成さんは少し俯きながら目を合わさないように言った。

あまり顔をみられたくないといった感じだけど、

その理由はすぐにわかった。

顔に痣がある。

誰かに殴られたような痕・・・。

土曜日に見かけた時にはなかったという事は・・・

あの後か昨日、何かあったのだろうか？

もしかして・・・

土曜日の一件で佐伯さんに“グーパンチの刑”にでもされたのかな？

まさか・・・ね？

だって、いくらなんでも女の子の力じゃあんな痕は残らないだろう

し・・・。

昼休憩、珍しく矢野さんが私と智子に合流し、

一緒にお昼ごはんを食べようとってきた。

「珍しいですねー？矢野さんが私達と一緒にご飯食べようなんて。」

ホントはなんとなく理由はわかっていた。

多分・・・康成さんの事。

「ん・・・まあ・・・。」

矢野さんはなんだか曖昧に返事をした。

智子もちよつと複雑な顔をしている。

あー、絶対、康成さんの事だ・・・。

私の予感は的中し、矢野さんは少し間を空けた後、

「あのさ・・・日高の事なんだけど・・・。」

と、少し言いづらそうに切り出した。

ほら、当たった。

「愛美ちゃんはいつから知ってたの？」

「？」

「・・・日高が佐伯さんとも付き合ってたの。」

「聞いたんですか？」

佐伯さんの名前が出たという事は、私と康成さんが別れた理由も知っているという事・・・康成さんに聞いたのかな？

「一昨日偶然、佐伯さんと一緒にいる所を見たんだ。

それで・・・昨夜、日高を呼び出して問い詰めた。」

「そうですか・・・。」

土曜日・・・矢野さんもどこかで康成さんと佐伯さんの姿を目撃してたんだ。

「私・・・日高さんと愛美はつきり上手くいつてるんだと思ってたのに・・・。」

「なんで言ってくれなかったの？」

智子はなんだか私よりショックを受けてるみたいに言った。

「あー・・・私も先週、康成さんから別れてくれって言われたときに初めて知ったから・・・。」

「なんだよそれ・・・。」

矢野さんは怒りを押し殺したような声で呟いた。

「智子、先週私に変な事言ってたの憶えてる？」

「あー、なんかおかしい事言ってたねー。」

「・・・実はあの時ね・・・。」

私は一週間前に見た、幻覚のような白昼夢のような・・・

あの夢の話をした。

「・・・で、その日の夜に夢の通りに康成さんに呼び出されて別れてくれって言われたの。」

その時にね、佐伯さんに子供でもできた？って聞いたら、

『知ってたのか？』ってあっさり認めたから、

平手打ち喰らわして、水ぶっ掛けてさよならしてやった。」

ちよつと笑いながら話す私を智子と矢野さんは啞然としながら見ていた。

「そんな事ってあるんだ・・・？」

信じられないといった感じで智子と矢野さんは顔を見合わせた。

それはそうだろう・・・夢を見た本人・・・私だって

信じられなかったんだから。

「不思議なことに私・・・今はもう全然康成さんの事、気にしてないの。」

だって・・・あの時、別れていなかったら・・・

先輩とも未だに再会できていなかったかもしれないし・・・。

そう思うと、むしろ別れてよかったんだとさえ思える。

「ホントに？」

智子は私が強がりと言ってるんだと思っているらしい。

心配そうな顔で私の顔を覗き込んだ。

「うん。」

私は笑って即答した。

「それにね・・・実はその日康成さんと別れた後、夢に出てきた先輩に会えたの。」

「「えーっ!？」」

「それで・・・」

「まさか・・・その人ともう付き合い始めたとかいう驚愕の展開？」

智子は私が言い流している事をまんまと言いつた。

「・・・うん・・・その、まさかだったりして・・・。」

「「えーっ!?!」」

「愛美、展開早すぎっ!」

「いや、私もそう思ったんだけど・・・。」

「それであの次の日、愛美が超ご機嫌だったんだ?」

「あ・・・でも、付き合い始めたのは土曜日からだったりして・・・。」

「「それにしたって・・・早いよ・・・。」」

智子と矢野さんは苦笑いした。

「だから・・・その・・・智子も矢野さんももう気にしないで・・・?」

ホント・・・ごめんね、ありがとう。」

「んー、まあ・・・愛美ちゃんがもう気にしてないなら・・・よか

った。」

矢野さんは私に柔らかない笑みを向け、少し安心したように言った。

「じゃー今度、その新しい彼氏紹介してよ。」

二股かけるような男かどうか見てあげるー。」

智子は矢野さんとは対照的に意地悪そうな顔をした。

「もうっ、先輩はそんな人じゃないよっ。」

「あはは、冗談よ。」

智子はすぐになっこりと笑って言ったけど・・・

ホントに冗談で済むのかな？

しばらくは先輩とは会わせないほうがいいのかもしれない・・・。

「だけど、あの日高さんの顔の痣・・・どーしたんだろうね?」

お弁当を食べ終わった後、食後のコーヒーを3人並んで飲んでいると、

智子も気になっていたのか、不思議そうな顔をしながら言った。

すると矢野さんが何食わぬ顔で答えた。

「あー、それ俺がやった。」

「「えっ!?!」」

私と智子は同時に声をあげて驚いた。

「昨夜、あいつを呼び出して愛美ちゃんと別れた理由聞いたときに、ものすごくムカついたから、思いっきり一発ぶん殴ってやったんだ。」

・・・あ、それと俺、ついでにあいつと友達の縁も切ったから。」

ポカンと口を開けたまま驚いている私と智子に、

矢野さんはさざりと言ってニツと笑った。

。あの痣は・・・矢野さんからの“グーパンチの刑”だったんだ・・・

ナルと再会してから一週間が経った。

そして付き合い始めて4日目の今日・・・6月14日は

ナルの25回目の誕生日だ。

昨夜、ナルに電話をして今日の夜、待ち合わせをした。

もちろん、ナルと二人きりでお祝いをする為。

・・・なの、に、だ・・・。

「今夜、取引先から急に接待が入ったから広瀬も来い。」

と、今井先生からの無情なその言葉で俺の“二人だけでナルの誕生日会計画”は

見事に夢と散った・・・。

なんでよりによって今日なんだ？

せっかく、いろいろ店までリサーチして予約して、

密かにプレゼントも準備してたのに・・・。

俺は心の中で“鬼だ！悪魔だ！”だと嘆きながら、

顔も知らないその取引先の奴らを恨んだ。

午後7時。

俺は今井先生と先生の一人娘・澄子ちゃんの三人で、とある料亭に向かっていた。

澄子ちゃんは将来、先生の跡を継ぐ予定だ。

その為に大学で建築学科を専攻していて

先生の事務所でもアルバイトをしている。

だから、こうして何かと言うと先生にいろいろと連れまわされてい

る。

ついこの間、20歳になったばかりだからお酒の席にも連れて行けるようになった。

料亭に着き、通された座敷に入ると取引先の連中はすでに来ていた。

連中・・・といっても営業部長のその部下の二人。

後からもう一人女性が来るらしいが。

挨拶と名刺交換をして俺はその部下の男を見て驚いた。

「矢野!？」

「広瀬っ!？」

その男も俺の顔を見るなり、驚いていた。

その男・・・とは、矢野純一。

高校の同級生で俺と同じ野球部だった奴だ。

「久しぶりだな、広瀬。」

「おう、まさかお前が取引先だったなんて思わなかったよ。」

「俺もまさかお前が今井先生のところにいるなんて思ってもみなかったよ。」

俺と矢野がそんな会話をしていると、仲居に案内されて、女性が一人入ってきた。

「遅くなつてすみません。」

「あ、愛美ちゃん、こっち。」

・・・ナルミちゃん？

俺は矢野の隣に座った女性の顔を見て、また驚いた。

「ナルツ！？」

「あつ！先輩！？」

ナルだーーーーっ！！

「愛美ちゃん、広瀬と知り合い？」

「はい、大学の時の先輩なんです。」

おいおい・・・今はそれだけじゃないだろ？

・・・で、ここでそんな事言えるワケないか。

「矢野さんも広瀬先輩とお知り合いだったんですか？」

「広瀬とは高校の時の同級生で同じ野球部だったんだよ。」

「へえー、そーなんですかー。」

そういえばナルの会社は建築資材を扱ってるって言ってたな。

もしかしたら、取引があるかもしれないと思っていたけど……。

矢野がここの営業部という事は、ナルは矢野と同じ部署なのか。

今日の接待は堅苦しいものではなく、新しく『今井建築事務所』の担当になった

矢野との顔あわせと俺と澄子ちゃんの紹介を兼ねた親睦会みたいなものだった。

ナルはこういった接待の席にも慣れている様子で、

絶妙のタイミングでみんなにお酌をしていた。

大学の頃は飲み会と言えばみんなテキトーに飲むだけ飲んでいたのに、

そういう姿を見るとあの頃のナルとは違うんだな……と思う。

澄子ちゃんは……さすがにまだそんな気は回せないみたいだ。

親睦会が終わった帰り、

「愛美ちゃん、送って行くよ。」

・・・と、矢野がナルを送って帰ると言い出した。

それはダメだろっ？

「あ、いえ、大丈夫ですよー？」

「ダメダメッ！愛美ちゃんを放置して帰ったのがバレたら智子に殺される。」

「でも、矢野さん、逆方向じゃないですかー？」

「だったら、俺が送って帰るよ。」

俺はナルと家の方向が同じだしな。

「む、それはマズい！」

矢野はそう言つと急に俺の前に立ちはだかった。

「何がどうマズいんだよ？」

「“送り狼”になる可能性があるからな？」

矢野はにやりとした。

コイツ・・・昔、俺が部活で遅くなった時にマネージャーの女の子を家まで送ってそれが切欠で付き合う事になったのを思い出したな・・・。

「あ・・・矢野さん、大丈夫ですよ？」

「愛美ちゃんはコイツの裏の顔を知らないからそんな事言えるんだよー。」

「裏の顔って・・・。」

「コイツは昔・・・もがつ・・・。」

俺は咄嗟に矢野の口を塞いだ。

「矢野・・・余計な事言っとなって。」

「あ、あの・・・矢野さん、広瀬先輩ならホントに大丈夫ですよ。」

それに、先輩なら同じ方角ですし・・・。」

そうそう。

「・・・？・・・愛美ちゃん、広瀬の家知ってんの？」

矢野は俺の手を口から引き剥がし、ナルに不思議そうに聞いた。

「えっ！？・・・あ・・・っ！・・・え、えーと・・・」

俺は実家を出て、一人暮らし・・・という話まではしたけど

どこに住んでいるとまでは言っていない。

それに気付いた矢野・・・そして慌てるナル・・・。

「・・・て・・・愛美ちゃん・・・もしかして、

昨日言ってた先輩って・・・」

「あ……えーと……はい……実は……。」

ナルの顔が少し赤くなった。

「あ、そーなんだ？そうか、そうか！んじゃ、後は広瀬に任せた！」
矢野はなんだか急に態度をコロツと変えた。

……なんだ？

なんなんだ、一体？

そして、訳がわからないまま、

俺とナルはタクシーでナルの部屋へと帰った。

「私の部屋、先輩のところよりも随分狭いから、

多分、びつくりすると思いますよ。？」

「どれくらいの広さなの？」

「1LDKです。」

そう言いながらナルは部屋の鍵を開けた。

「先輩、どうぞ。」

「お邪魔します。」

ナルが言っていた通り、部屋は俺のマンションよりも随分狭かった。

だけど、彼女の部屋はあまり物が置かれていない所為か、

窮屈だとは感じなかった。

「先輩、飲み物何がいいですか？」

「うーん・・・コーヒ・・・かな？」

「はい、じゃ、適当に座って待っててください。」

「うん。」

そして数分後、ナルは熱いコーヒーを俺に出してくれた。

「先輩、コーヒーはブラックでしたよね？」

「うん。」

大学の頃からずっと俺がブラックしか飲まないのを憶えててくれたんだな。

「ナルはいつも甘いカフェ・オレだったよな？」

俺がそう言うてにやりと笑うとナルは「えへへ。」と可愛く笑っていた。

「しかし、驚いたな・・・まさか接待の席にナルが来るなんて

思ってもみなかったよ。」

「今日は私も急に“お酌係り”で借り出されたんです。」

「あはは、そーなんだ？・・・けど、そのおかげで会えたからいいけど。」

「そーですね。」

「だけど、なんで矢野の奴、急にナルを俺に任せるとか言い出した

「んだったら？」

「あー、それはー……。」「

少し恥ずかしそうにナルは昨日、矢野に俺との事を話したと説明してくれた。

なるほど……。それでか……。

あ……。それよりも……

今、何時だ？

「あ、先輩、時間大丈夫ですか？」

急に腕時計で時間を確認した俺にナルが言った。

「まずい、まずい……」

「もう11時だ。」

ナルの誕生日が後一時間で終わってしまうじゃないかっ。

「ナル、目瞑って。」

「え．．．？」

「早く。」

「あ．．．はい。」

ナルが目を瞑っている隙に俺はカバンの中からプレゼントを出した。

「もう開けていいよ。」

俺がそう言つとナルはゆっくりと目を開けた。

そして目の前に置かれたプレゼントが視界に入ると目をパチパチとさせた。

俺はそんなナルの様子が可笑しくてつい吹き出してしまった。

「早く開けないと誕生日終わっちゃうぞ？」

「へ．．．？、誕生日．．．？」

「おいおい．．．自分の誕生日も忘れたのか？」

「私の誕生日．．．？．．．あっ！」

「ホントに忘れてた？」

「．．．ちょっとだけ．．．。」

「ウソつけ、すっかり忘れてただろ？」

俺がおでこをツンとつつくとナルはコクンと頷いた。

「誕生日おめでとう。」

「先輩・・・憶えてくれたんですか・・・？」

「当たり前だろ？本気で好きな女の子の誕生日は何年経っても忘れないよ。」

そう・・・“本気で好きな女の子”は・・・な。

私と広瀬先輩が付き合い始めて二週間が過ぎたある朝、

一通の社内メールが届いた。

別になんて事はない毎月全社員に届くただの社内報のメール。

だから私も何気なくザッと目を通すつもりで開いた。

すると、とあるコーナーに康成さんの名前が載っていた。

社員の結婚や出産などおめでたい記事が載っているコーナー。

その中に佐伯さんと婚約したと書かれていた。

二人の幸せそうなツーショットと一緒に載っている。

婚約したんだ・・・。

私が感慨深くその記事を見ていると隣からものすごい視線を感じた。

「・・・な、なんですか・・・？」

隣に座っている矢野さんがじっと私を見つめていたのだ。

「・・・いや、別に・・・。」

そう言ったわりに矢野さんは何か言いたそうな顔をしていた。

おそらく康成さんの記事を見て私がまた傷ついたと思ったんだろう。

「私なら全然平気ですよ。」

そう言ってみせても矢野さんは私の顔をじっと見つめている。

「・・・。」

“全然平気”・・・その言葉に嘘はない。

だって、別にこの記事を見ても傷ついたりなんてしていないから。

ただ・・・“捨てられた”という傷は正直まだ完全には癒えていない。

「ホントですって。」

傷は癒えていないけど、私は今、一人じゃない。

広瀬先輩がいるから・・・。

だから、今こうして矢野さんにも笑顔を向ける事ができる。

私はにっこり笑って見せた。

すると、矢野さんも安心したのか、

「・・・うん。」

と言って、少しだけ笑った。

それからさらに2ヶ月が過ぎた週末、土曜日。

ここ最近、週末はずっと先輩の部屋と一緒に過ごしていた。

だけど、今日は自分の部屋に一人にいる。

先輩が休日出勤になってしまったから。

そんなワケで突然暇人になった私は一人、部屋でゴロゴロしていた。

暇だなあ・・・。

これといって特に趣味もない私は時間を持て余していた。

大学の時はいつも誰かと一緒に遊んだり勉強したりしていたし、

就職してからは康成さんと一緒だった。

そして、康成さんと別れたとほぼ同時に先輩と付き合い始めたし。

考えてみれば、今までまともに一人になった事はなかったのかも。

だけど休日出勤なんてこれからだってフツーにあるだろうし・・・、

一人の時間の使い方を考えておく事も必要・・・だよな？

“ 一人の時間の使い方 ” ・ ・ ・ 何をすればいいんだろう？

私はベッドに寝転んだまま目を閉じて考えた ・ ・ ・。

そして ・ ・ ・

いつの間にか寝てた。

・ ・ ・
　　）
　　）

「 ・ ・ ・ んあっ？ 」

携帯の着メロで私は目が覚めた。

・・・あ、先輩だ！

広瀬先輩専用の着メロが鳴り響いていた。

「もしもしっ。」

『俺・・・なんかしてた？』

私がなかなか電話に出なかったからか、

先輩は少し遠慮がちに言った。

「あ・・・いえ、大丈夫です。」

・・・実は寝てました。

窓の外を見るとすっかり暗くなっていた。

私は部屋の灯りを点けてベッドに腰掛けた。

時計をみると・・・

え・・・っ!?

もう10時!?

私・・・どんだけ寝てたの・・・?

『明日なんだけどさ・・・』

“浦島太郎状態”の私は先輩の声でハツとした。

「あ、はい・・・?」

『明日も仕事でちょっと会えそうにないんだ・・・。』

「そうですか・・・。」

明日も会えないのか・・・。

ホントなら今からでも会いたいと思っていたけど、

明日も仕事なら“会いたい”なんて言えない・・・よね？

それに先輩は仕事帰りできっと疲れているだろうし・・・。

『・・・ごめんな。』

電話の向こうから聞こえる先輩の声は少し疲れているようだった。

「気にしないでください。」

『・・・うん。』

「今週会えなくても来週があるじゃないですかー。」

『・・・うん、そうだな。』

私と先輩はそれから少しだけ話をした。

別になんて事はない話だけど、それでもやっぱり先輩と話していると楽しい。

電話を切った後、しばらくして先輩からメールが届いた。

毎日届く“おやすみメール”。

付き合い始めてから、先輩は毎日欠かさず送ってくれている。

仕事で遅くなつて電話で話せない日があつても朝起きると届いている。

そしていつも私はちよつと幸せな気持ちでメールを返していた。

次の日、日曜日。

お昼過ぎ、天気も良いしずっと部屋の中にいるのも

もつたいないのでちよつと街ぶら。

特にこれといって買うものもないけれど。

ただど何気なく入ったCDショップでちよつと気になるモノを発見した。

先輩が見たいと言っていた映画のDVD。

ちょうど今日が発売日らしい。

しかも初回生産の特典付き・・・！

先輩は仕事に行ってて買う暇がないだろうし、

なにより人気の映画だから買えなくなる可能性がある。

現に目の前で数人が買って行った。

ここは買つとくしかないっ！

私は自分の部屋に戻る前に先輩の部屋に寄る事にした。

合鍵はすでにもらっている。

きつと多分、まだ仕事から帰ってきていないだろうけれど・・・。

先輩・・・部屋に帰って、いきなりこのDVDが置いてあったら
びっくりするかな？

どんな顔するだろ・・・？

私は先輩の驚く様子を想像（妄想？）しながら、先輩のマンションに向かった。

電車を降りて、駅の改札を抜けると雨が降っていた。

いつの間に降り始めたんだろう？

電車の窓から見えていたはずなのに妄想してて全然気がつかなかった。

先輩のマンションは駅からそんなに離れていない。

だけど、結構などしゃぶり・・・にわか雨のような気もするけれど
とりあえず駅の中にあるコンビニで傘を買った。

先輩のマンションに着いた頃、さらに雨は強く降り始めた。

傘を買って正解だったかも。

エレベーターに乗って先輩の部屋がある7階で降りると、

雷まで鳴りだした。

嵐でも来るのかな・・・？

でも、天気予報では台風情報なんてなかったし・・・。

そんな事を思いながら、私は先輩の部屋の鍵を開けた。

けどドアノブに手をかけ、開けようとして鍵が閉まっている事に気がついた。

・・・あれ？

鍵・・・開いてたのを閉めたのかな・・・？

私はもう一度、鍵を回してドアを開けた。

やっぱり・・・開いてた？

先輩・・・帰ってるのかな？

「先輩・・・？」

とりあえず中に向かって呼びかけてみる。

玄関まで入ったところでシャワーの音が聞こえてきた。

お風呂？

やっぱり帰ってるんだ。

するとリビングから先輩が顔を出した。

「ナルツ！？」

先輩は私が来たことに驚いたようだ。

「あれ・・・？先輩・・・お風呂に入ってるんじゃない・・・」

「え・・・？」

先輩は少し青ざめた顔になった。

先輩がここにいるという事は・・・

お風呂に入っているのは・・・誰？

なんだか嫌な予感がした。

そして、その嫌な予感は的中した。

玄関に女の子の靴がある・・・。

もちろん私のじゃない。

「・・・。」

うそ・・・

「ナル・・・」

私になにか言いたそうな顔をして近づいてきた先輩の髪は濡れていた。

お風呂あがりみたいだ。

私はそれに気がついた瞬間、咄嗟に先輩の部屋を飛び出した。

「ナルツ！待つて・・・っ！」

先輩はすぐに私を追いかけてきた。

来ないで・・・！

・・・来ないで、来ないでっ！

私はエレベーターに駆け込み、急いで開閉ボタンを押した。

「ナ・・・」

ドアが閉まり、先輩の声が聞こえなくなった途端、涙が溢れてきた。

先輩は違っと思ってたのに・・・っ。

仕事なんて嘘じゃない・・・っ！

私・・・また二股かけられてたの・・・？

エレベーターを降りてマンションを出た後、

私は雨の中を走った。

駅とは違う方向に傘もささず・・・。

夢中で走って、走って・・・

走っている間・・・ずっと携帯が鳴っていた。

・・・先輩専用の着メロ。

それでも私は走り続けた。

思いつきり走って、疲れて・・・そして立ち止まると、
雨はすっかりあがっていて、暗くなった空には
薄っすらと月が見えていた。

私は携帯をバッグから出して電源を切った・・・。

翌日、月曜日。

昨日、雨の中をずぶ濡れになって走っていた私は
風邪をひいて会社を休んだ。

でも、本当は先輩の事がショックだったから・・・。

風邪の方は体は重いけど熱もなく、少し喉と頭が痛い程度。

先輩の事がなければ普通に会社に出ているだろう。

要するにちよつとズル休み。

だから、今はベッドに寝ているワケでもなく、

ボーッとしながらテレビを見ている。

会社からかかってくるかもしれないから一応携帯の電源は入れておいた。

時々、先輩専用の着メロが鳴っている。

なんでかけてくるの・・・？

もう私の事なんて放っておいてよ・・・。

数時間おきに鳴る携帯・・・それでも私は出なかった。

夜になって先輩からの電話もなくなった。

そしていつもなら届いていた“おやすみメール”も昨日からない。

涙がポロポロと溢れてきて自分でも気がつかないうちに

こんなにも先輩の事が好きだったんだと思い知らされた気がした。

康成さんの時は、二股かけられてたとわかった瞬間、

すぐに冷めていったのに今回は違う・・・。

康成さんに捨てられた傷もまだ完全に癒えていないうちに

先輩に二股かけられていたのが発覚したからかもしれないけど・・・

私・・・立ち直れるのかな・・・。

翌日、火曜日。

さすがに二日もズル休みをするワケにもいかず、

私はとりあえず出社した。

風邪の方も昨日おとなしくしていたおかげで

すっかり良くなった。

「日曜日、広瀬と雨の中デートでもしたの？」

矢野さんはククツと笑うと

「あいつは今日も寝込んだままみただけど、

愛美ちゃんはまだもう平気なの？」

と言った。

・・・寝込んだまま？

今日も・・・て・・・？

「・・・広瀬先輩・・・どうかしたんですか？」

「えっ！？愛美ちゃん・・・知らないの？」

先輩の様子をまるで知らない私に矢野さんは驚いたようだった。

「昨日、あいつと仕事の事で打ち合わせする予定だったんだけど、

会社休んだみたいでさ、風邪が酷いらしくて・・・

さっき電話したら今日も寝込んでるらしい。」

・・・え・・・。

「日曜日、雨に濡れたまま長時間外にいたと言ってたな！。」

「・・・。」

長時間で・・・。

9月にはいったばかりでまだ夏の暑さは残っていても、

夕方には気温は下がる・・・それにあのどしゃ降り。

その中を濡れたまま長時間外に・・・？

どうして・・・？

・・・いや、そんな事よりも・・・そんな状態でずっと外にいれば

風邪をひくのは当たり前で熱だって出していたっておかしくない・・・。

101

それにあの先輩が仕事を休むなんて相当酷いのだろう・・・。

先輩・・・大丈夫なのかな・・・？

夕方。

定時を少し過ぎた頃、矢野さんが「早く帰れ。」と言い出した。

「愛美ちゃん、病み上がりなんだから今日はもう帰りなよー？」

「え．．．あ、はい．．．。」

はい．．．とは言ったものの、私はまだ帰る気にはなれないでいた。

先輩の事は正直、ものすごく気になっているし、

今すぐにも先輩のマンションに行きたかった。

だけど．．．先輩の部屋に“彼女”が来ているかもしれない．．．。

そう思うとやっぱり私は行かないほうがいいんだと思ってしまう。

今朝からずっとその繰り返し．．．先輩のところへ行きたくて．．．

でも、“彼女”と鉢合わせになるのが怖くて．．．。

そして．．．とうとう定時を過ぎてしまった。

「愛美ちゃん．．．マジで今日はもう帰りなよ．．．」

早くあいつのどこ行ってやれって。」

なかなか先輩のところへ行く勇気が出ない私の背中を押してくれた

のは

矢野さんの言葉だった。

もちろん、矢野さんは先輩が二股をかけてるなんてことは知らない。
だから先輩のところへ早く行けと強く言える。

私は矢野さんの言うとおり、先輩のマンションに行く事にした。

電車の中や、先輩のマンションへ行く間、ずっといろいろ考えた。

“彼女”が来てたらどうしよう・・・？とか、

私が行ったら先輩はなんて言うだろう・・・？とか、

それとも、寝込んでるだろうか・・・？とか、

実は“彼女”の部屋で寝てるのかも・・・？とか・・・

マンションの下まで来て立ち止まり、

エレベーターを降りてまた立ち止まり、

そして先輩の部屋の前でまた立ち止まり、

私はインターフォンを押せずにいた。

けど、いつまでもこうして突っ立っていたって仕方がない。

しばらく考え、私は思い切ってインターフォンを押すことにした。

もし、“彼女”と鉢合わせになったら・・・その時はその時！

・・・ええいつ！

儘よ！

・・・ピンポン・・・。

・・・。

先輩・・・いないのかな？

中からは誰もでてくる様子がない。

私は恐る恐る合鍵でドアを開けた。

玄関には・・・昨日見た女の子の靴はない。

先輩の靴だけ。

そのことに少しホッとして、それでも私はおずおずと薄暗いリビングに入り、

部屋の灯りを
点けた。

先輩寝てるのかな？

寢室のドアを開けると、廊下の灯りに照らされてベッドの中で寝ている先輩が見えた。

少し近づいてみると、なんだか苦しそうだ。

「・・・先輩・・・？」

小さな声で呼びかけてみるけれどまったく反応はなく、

そっと先輩の額に手をあてるとものすごい熱が伝わってきた。

酷い熱だ。

私は急いでリビングに戻って冷凍庫を開けた。

アイスノンがない。

あー、そうだ・・・。

先輩の部屋にはいろいろ揃っていないものが多々あるんだった・・・

。

私は風邪薬が置いてありそうな場所を探した。

だけどやっぱりそんなモノはなく、冷蔵庫の中もほぼ空っぽの状態だった。

先輩・・・もしかして・・・何も食べてないとか・・・？

・・・ピンポン・・・

夕方、インターフォンの音で俺は目が覚めた。

・・・誰だ？

ピンポン・・・

・・・ナル・・・かな？

いや・・・だけど、ナルなら合鍵を持っているし、

何より・・・昨日からずっと電話に出てくれないから

ここに来るワケがないか・・・。

一昨日のどしゃ降りの雨の中、ずぶ濡れのままナルを追いかけて、

アパートにも行ってみた。

だけどナルはしばらく待っても帰って来る様子もなく、

彼女が行きそうな場所を全部回り、探し続けた俺は

見事に風邪をひいた。

そして昨日からずっと寝込んでいる。

・・・ピンポン・・・

しつこいな・・・。

こっちは風邪で死にそうだって言うのに・・・さっさと帰ってくれ。

ピンポン・・・

さらに鳴り続けるインターフォン。

だけど俺は起き上がることも出来ないでいた。

すると傍に置いてある携帯が鳴った。

誰だよ・・・。

ナル専用の着メロじゃないからナルじゃない事だけは確かだ。

「・・・はい、もしもし？」

『あ・・・澄子です・・・。』

澄子ちゃん？

「・・・どうしたの？」

『あの・・・今、広瀬さんの部屋の前にいるんですけど・・・。』

さっきからインターフォンを鳴らしてたのは澄子ちゃんだったのか・
・・。

『広瀬さん、風邪だって聞いたから・・・それで・・・』

「・・・。」

『・・・昨日も休んでたし・・・あの・・・中にいるんですね？』

開けてもらえませんか？』

「・・・いや・・・、大丈夫だから・・・。」

「昨日、澄子ちゃんを部屋に入れたおかげでナルに誤解させてしまった・・・。」

止むを得ない理由だったとしてもそれが原因でナルを傷つけてしまった。

だから俺はもう二度とナル以外の女の子は部屋に入れないつもりだ。

『・・・広瀬さん・・・』

「ごめん・・・澄子ちゃん・・・せつかなんだけど、
帰ってくれないかな・・・。」

『どうしてですか？』

「・・・これ以上、彼女に誤解されたくないから・・・。」

『・・・』

「・・・どんな理由があっても・・・澄子ちゃんをもつこの部屋に
入れるわけにはいかないよ・・・。」

『・・・広瀬さん・・・お願い、開けて・・・。』

「澄子ちゃん・・・ダメだつて・・・。」

『どうしても・・・ですか？』

「うん・・・どうしても。」

しばらくの沈黙の後、

『・・・わかりました・・・今日は、帰ります・・・。』

そう言うと、澄子ちゃんは電話を切った。

その後、俺は携帯を閉じてまた眠りについた。

どれくらい寝ていたのかわからないけれど・・・

後頭部と額に感じる冷たい感触で目が覚めた。

「あ・・・ごめんなさい・・・起こしちゃいました？」

・・・ナルの声？

熱のおかげで朦朧とする意識の中、視界にナルの心配そうな顔が入ってきた。

「・・・ナル・・・？」

ここにナルがいるはずがないと思いながら、

やけにリアルに見えるナルの姿に向かって呼びかけてみた。

「・・・はい。」

返事をしたナルが俺はまだ幻とも現実とも区別がつかないでいた。

俺はそつと手を伸ばしてナルの頬に触れてみた。

暖かくて、柔らかくて・・・まるで本物のナルに触れているようだった。

「・・・先輩？」

ナルは頬に触れている俺の手をぎゅっと握ってくれた。

・・・夢・・・なのか？

「先輩・・・大丈夫ですか？」

ナルは少しだけ俺に顔を近づけた。

それでも・・・まだ夢なのか現実なのかがわからない・・・。

だけど掌に感じているナルの頬の温かさ・・・

それに手の甲に感じているナルの掌の温かさも決して夢なんかじゃない気がした。

夢なら・・・何も感じない・・・。

「ナル・・・来て・・・くれたのか・・・？」

「はい・・・。」

本物のナルだ・・・。

「ナル・・・、ごめん・・・俺・・・」

俺は真っ先にナルの誤解を解きたくて、起き上がろうとした。

「先輩、まだ熱があるから・・・寝てないと・・・。」

「・・・いいから・・・ナル、聞いて？」

「でも・・・。」

「大丈夫だから・・・。」

俺がそう言つと、ナルはまだ心配そうな顔をしながら

「わかりました。」

と言つて、俺の体をそつと起こしてくれた。

「一昨日の事なんだけど・・・。」

「はい・・・。」

「俺の部屋にいたのは・・・先生のお嬢さんなんだ。」

「あの飲み会の時に今井先生の隣にいた・・・澄子さん・・・？」

「うん・・・それで、その・・・澄子ちゃんて将来、先生の跡を継ぐ為に

今、大学の建築学科に通ってるんだけど、土曜日と日曜日・・・課題の資料集めを

手伝ってくれて頼まれてさ・・・、けど・・・俺はナルと会いたかったし、

別に仕事でもないから断ったんだけど・・・先生がその会話を隣で聞いてて、

澄子ちゃんを手伝ってやってくれて・・・。」

「・・・それで・・・ここに・・・？」

「いや・・・ここには入れるつもりはなかったんだけど・・・、

一昨日、急に雨に降られちゃって二人ともびしょ濡れになったから

澄子ちゃんに風邪をひかせちゃいけないと思って・・・それで仕方なく。

・・・で、先に澄子ちゃんにシャワーを浴びさせてた時にナルが来ちゃって・・・」

「・・・それじゃあ・・・」

「・・・うん・・・澄子ちゃんとはなんでもないよ。」

俺がそう言った途端、ナルは涙を流して泣き始めた。

「・・・ごめんなさい、・・・ごめんなさい・・・」

「なんでナルが謝ってるんだよ・・・？謝らなきゃいけないのは

俺の方なのに・・・。」

「・・・だって・・・私、が・・・先輩の、事・・・ちゃんと、

信じて・・・なかったから・・・」

「違うよ・・・ナルが悪いんじゃない・・・。」

「・・・でも・・・」

「俺だって・・・もし、同じ場面を見たら・・・きっと、誤解してた・・・。」

「・・・先輩・・・。」

「先生の命令で仕方なく澄子ちゃんの手伝いをする事になったから・・・、

それでナルには“仕事”って言ったんだけど・・・ごめんな。

変に気を回しすぎたせいで・・・返って、ナルの事・・・傷付けた・・・。」

俺がちゃんとナルに話してれば・・・ナルを泣かせずに済んだのに・・・。

ホントに・・・ごめんな・・・。」

俺はナルの背中を撫でて泣き止むのを待った。

「資料集めはもう行かないよ。」

「・・・でも・・・澄子さん、やっぱり一人じゃ

大変なんじゃないですか？・・・課題のお手伝いなら・・・。」

「そんな事ないよ、だいたい課題の資料集めとか言つて、

結局あちこち連れ回されただけで、買い物にも付き合わされたし。

ほとんどデートみたいなもんだっただろ？」

「でーとお・・・？」

「そーだよ、だからあんなのもう手伝わなくていいの。

こっちが疲れるだけだよ・・・。」

「・・・むー・・・ずるい・・・私だって先輩とデートしたいです。」

俺と澄子ちゃんがデートしたと聞いて、ナルは口を尖らせた。

そんな顔をするところが少し子供っぽくてまた可愛い・・・と思ったけど、

“俺とデートしたい”と素直に感情を口にしてくれた事が

俺は嬉しかった。

「俺だってナルとデートしたいよ。」

ナルの尖らせた口にキスしようと俺は顔を近づけた。

「でも、当分はダメです。」

だけどナルは口を尖らせたままプイツと顔を背けた。

「えー、なんで!?!」

やば・・・マジで怒ったのかな・・・？

「病人だからですよー。」

あ・・・そーゆーコト？

「じゃ、治ったらデートしてくれる？」

「はい、もちろんです。」

ナルはにっこり笑った。

「ところで・・・先輩。」

「ん？」

「おなかすいてませんか？」

「あ・・・減ってるかも・・・。」

そつえば、何も食べてないんだつた・・・。

いつもなら週末、ナルと一緒に買い物に行く。

だけど先週は澄子ちゃんとの“強制デート”があつてナルと会えなくて

まともに買い物もしていない。

今からナルとメシを食いに行くにしても

俺はまだ熱で動けそうにないしなあ・・・。

「先輩、鍋焼きうどんなら食べられそうですか？」

「うん。」

・・・この辺に鍋焼きうどんの店なんてあつたっけ・・・？

「じゃあ、出来たら呼びに来ますから、それまで寝ててください。」

ナルはそう言つと寢室を出て、キッチンへと消えていった。

・・・“出来たら”って・・・ナル、買い物行つて来たのかな？

それにこのアイスノン・・・

しかもおでこに貼つてあるこの冷却シート・・・。

こんなの家になかったよな・・・？

それから１５分くらい経つた頃、ナルが寢室に俺を迎えにきた。

ダイニングテーブルの上には鍋焼きうどんが用意してあつた。

「ナル・・・買い物行つてきたのか？」

「はい、ついでに先輩の部屋なんにもなかったから最低限のモノだけですけど、

買つてきました。」

「重くなかった？」

「大丈夫でしたよ。」

「ごめん・・・いろいろありがとな。」

「・・・だって、私は先輩の“彼女”ですから。」

ナルはそう言うとしろ照れたように笑った。

「あ・・・そういえば、ナル。」

「はい？」

「今朝、矢野から電話があった時に聞いたけど、

ナルも昨日、風邪で会社休んだんだろ？」

もう大丈夫なのか？」

「昨日の雨の中、俺の部屋を飛び出した後、

ナルはしばらく待ってもアパートへは戻ってこなかった。

多分ずっと外にいて、その時に風邪ひいたんだろう。

「あ、私の方はたいした事なかったですし、

昨日一日寝てたらすっかり治りました。」

「そっか、それならよかった。」

考えてみればたいした事あったら俺のところに

こうして来てるはずじゃないか……。

“最低限のモノ”……ナルはそう言ったけど、

家の中にはなんだかいろいろと増えていた。

さっきのアイスノンといい、冷却シートといい、

そして今、目の前にある風邪薬。

食事が終わった後、水と一緒にナルが出してくれた。

さらにさっき冷蔵庫を開けたら、ポカリまであった。

しかも１リットルサイズのが。

鍋焼きうどんの材料といい・・・

絶対これ二往復くらいしてるだろ・・・。

その日の夜、ナルは俺の部屋に泊まった。

夜中に何度も起きて俺の布団を掛け直してくれたり、

アイスノンや冷却シートを取り替えてくれたりした。

ここ数年は風邪なんてひくこともなかったし、

ナルが来てくれるまで死にそうだったけど・・・

たまには風邪をひいて熱を出すのも悪くない・・・と思った。

・・・だって・・・ナルがいろいろ世話を焼いてくれるから。

ナルの方は大変なんだろうけど。

ちなみに、ナルは付き合い始めてから毎週末、

俺の部屋に泊まっているから急に泊まることになっても

困らなかったりする。

・・・て、言うか・・・俺達・・・別々に暮らす意味ってあるのか？

俺は常にナルと一緒にいたいと思っている・・・

日曜日の夜、ナルをアパートまで送って一人でこの部屋に

帰って来る時なんてものすごく寂しいと感じるもんなあ・・・。

ナルは・・・どう思ってるのかな・・・？

翌日、先輩は熱も下がり、朝食も普通に食べた。

だけど本当なら今日一日、まだ寝ていた方がいい気がするけど、

二日も会社を休んだし、もう大丈夫だからと

私と一緒に部屋を出て、車で私を会社まで送ってくれた。

私の会社と先輩の会社は近いけれど、

こうして一緒に出勤するのは初めてだ。

会社の前で先輩の車から降り、手を振って見送っていると

運悪く、智子に見つかってしまった。

「おはよう、愛美！」

なんだかにやにやしている・・・。

きつと、私が車から降りたあたりからずっと見ていたのだろう・・・

。

「お、おはよ。」

「朝から仲良く出勤？」

「今日はたまたまよ。」

「ふーん・・・て事は昨日、彼の部屋に泊まったんだ？」

「ん・・・まあ・・・風邪で寝込んでたから・・・。」

「あ・・・、愛美が月曜日休んでたのって・・・

実は彼に風邪うつされたの？」

「え・・・っ！？違うよっ。」

別々で風邪ひきマシタ・・・。

「別に隠すコトないのにー。」

「いや・・・ホントに・・・違うから。」

「ふーん・・・まあ、どっちでもいいけどー。」

智子はそう言つたとさつさと更衣室へと入っていった。

まあ・・・相手は智子だし、別に全力で否定することもないけれど。

智子の後に続いて更衣室に入ると佐伯さんと鉢合わせになった。

朝から嫌な相手に会っちゃったな・・・と思いつつ、

私が「おはようございます。」と言つと、

佐伯さんは無言で私を睨みつけ、更衣室を出て行った。

「何よ、あれ・・・。」

少し呆気にとられている私のかわりに口を開いたのは智子だった。

佐伯さんは康成さんと婚約を発表してから休憩室や更衣室で偶然会つても、

まるで勝ち誇つたような顔で私を見ていた。

だけど、私はもう康成さんの事は好きじゃなくなっていたし、
なにより、先輩と一緒にいられる事の方が幸せだから別に気にも留
めていなかった。

でも・・・なんだか今日の彼女は違っていた。

康成さんとケンカでもしたのかな？

・・・けど、それなら私は関係ないのに。

私は訳がわからないままだったけれど、特に気にする必要もないと
思い、

この一件は頭から離れていた。

そして週末、金曜日。

いつもなら仕事が終わってから先輩と一緒に買い物をして

マンションに帰る。

だけど先週は“休日出勤”になったと言われ、

結局、自分の部屋に帰った。

今週は・・・どうなるのかな・・・？

先輩はもう“資料集め”は手伝わない・・・とは言っていたけれど、
やっぱり今井先生のお嬢さんだし・・・手伝うことになる気がしていた。

定時を少し過ぎ、更衣室で私服に着替え終わると携帯が鳴った。
先輩からだ。

「もしもし。」

『もしもし、今どこ？』

「会社です。」

『まだ仕事してた？』

「いえ、ちょうど着替え終わって出るところでした。」

『そっか、ちょうどよかった。俺も今、仕事終わったところだから、ナルの会社に迎えに行くよ。』

「はい、わかりました。」

先輩が迎えに来てくれる・・・と言っことは

土日は一緒に過ごせるって事なのかな？

10分後、先輩が車で会社の前まで来てくれた。

「先輩、お仕事終わるの早かったですね？」

「うん、先週ナルとゆっくりできなかった分、早く終わらせて

早く会いたかったから。」

「あ、でも・・・あの・・・先輩、明日は・・・大丈夫なんですか？」

「明日？」

「・・・澄子さんの資料集め・・・とか。」

「あー、それなら大丈夫だよ。」

先輩は心配ないと言った感じで小さく笑った。

「確かに澄子ちゃんからまた土日資料集め手伝って欲しいって言われたけどね。」

「あ……じゃ、それなら……」

「けど、先週デートしてたおかげでほとんど資料が集まってないのを見て、

先生が怒っちゃってね。」

「先輩をですか？」

「いや、澄子ちゃんを。……ちゃんと真面目に資料集めてないから、

何の為に休みの日にまで俺を無理に付き合わせたのか・・・て。

だからもう手伝わなくていいって先生からも言われたし。」

「そうですか。」

「そんな事より、今日は久しぶりにナルのコロッケ食べたいなー？」

子供がお母さんに夕食のメニューをおねだりするみたいに

先輩は私の顔を覗き込んだ。

“自称・三流シェフ”・・・だけど先輩は私が作るものをいつも

「おいしいよ。」って笑って食べてくれる。

「じゃあ、頑張って作ります。」

私がつこり笑って返事をする先輩は嬉しそうな顔をして

いつも一緒に行くスーパーに向かってハンドルを切った。

買い物を済ませて先輩のマンションに戻ると、

先輩の部屋の前に人影が見えた。

女の人・・・あれは・・・

澄子さん・・・？

「澄子ちゃん・・・っ!？」

ナルと一緒に夕食の買い物を済ませ、俺のマンションに戻ると

澄子ちゃんが部屋の前に立っていた。

「・・・千秋さん・・・？」

澄子ちゃんは俺の隣にいるナルに視線を向けた。

「どうして千秋さんが広瀬さんと一緒にいるんですか？」

彼女が少し強い口調でそう言うと、繋いでいた手から力が抜けたナルは

ほんの少しだけ後退りした。

「俺の彼女だから。」

俺はナルの手をぎゅっと握った。

「……。」

澄子ちゃんは驚いた表情のまま、今度は俺に視線を移した。

「澄子ちゃん……どうしてここに？」

なんとなく理由はわかっているけれど……。

「……明日……どうしてもダメですか……？」

「……やっぱり……あの事が。」

「今井先生にも言われただろ？」

「明日はちゃんと資料集めに専念しますから……っ！」

「一人でできない事ないだろ？」

「でも・・・一人だと・・・」

「だったら同じ大学の子と協力してやれば？」

「私・・・っ、広瀬さんに手伝ってもらいたいんですっ。」

「悪いけど・・・無理だよ、手伝えない。」

「パパに言われたからですか？」

「違うよ・・・例え先生にまた命令されたとしても俺は断ってた。」

「じゃあ・・・どうして・・・？」

「彼女との時間を大切にしたいから。」

「それなら・・・せめて土曜日か日曜日のどちらかだけでも・・・」

「ダメ。」

「・・・。」

「とにかく・・・俺が手伝うことはできないから。」

そう言い放ち、俺はナルの手をひいて澄子ちゃんの横を通り過ぎた。

部屋の鍵を開けて、先にナルを入れてから俺も部屋に入ろうとした時、

澄子ちゃんが泣き出した。

「・・・せ、先輩・・・。」

ナルにも澄子ちゃんの泣き声が聞こえたらしく、

不安そうな顔で俺を見上げていた。

俺は澄子ちゃんを振り返ることもせずドアを閉めた。

「先輩・・・澄子さん、放っておいていいんですか？」

「いいよ、俺が行ってもしてやれる事は何もない。」

「でも・・・。」

「それに今、俺が行けばナルを放っておく事になる。

ナルはそれでもいいの・・・？」

「それは・・・」

いいわけないよな？

「・・・例え、ナルがそれでいって言っても俺は嫌だから。」

ナルの事だから無理してそれでも行つてやれと言つかもしれない・
・

そう思った俺はナルの口が開く前に言った。

そして俺がリビングに入ってもナルはまだ外の様子をなんとなく気にして

玄関に立つたままだった。

「おいで・・・ナル。」

「・・・はい。」

俺が呼ぶとナルはやっとリビングに入ってきた。

「澄子ちゃんてさ、一人っ子で甘やかされて育ってきた所為か、

何でも自分の思い通りにならないと気が済まない性格なんだよ。」

実はスーパーでナルと買い物をしている時も

澄子ちゃんから携帯に電話があつた。

マナーモードにしてて出なかったからナルには気付かれなかったけど。

「今朝も散々、先生に叱られて俺も何度も断つたのに……。」

「そうなんですか……。」

「それより、ナル、何からすればいい？ ジャガイモの皮むき？」

「え……？ あ、はい。」

買い物袋からクロツケの材料を出し、ナルと一緒に夕食作り。

これがまた楽しかったりする。

ナルは以前、“自称・三流シェフ”だとか言ってたけど、

実は全然そんな事はない。

味はもちろん、手際だっていい。

手が込んだ物は無理です・・・と、この間も胸を張って言っていたけど、

レポートリーは少なくない方だと思う。

「できたーっ！」

「んー、うまそー！」

揚げたてのクロツケと野菜スープ、ほかほかの炊き立てご飯と冷蔵庫から冷やしておいたサラダを出してテーブルに並べた。

まさしく“幸せ家族の食卓の図”。

「「いただきまーす！」」

コロッケを一口食べると中からほくほくと湯気があがった。

「おいしい！」

「ホントですか？」

「うん、やっぱりナルのコロッケ最高！」

「えへへ、そう言ってもらえると嬉しいです。」

ナルは少し照れながら嬉しそうに笑った。

最高なのはコロッケだけじゃないんだけどな。

あんまり褒めるとナルの場合、真っ赤になって俯いてしゃべらなくなるし。

照れながら嬉しそうに笑う顔がすごく可愛いから、

褒めるのはとりあえずこれくらいにしておく。

付き合い始めて2ヶ月目で覚えた“小技”・・・だっ
たりなんかする。

月曜日、夕方。

もう少しで定時という時、携帯にメールが届いた。

仕事中は一応、マナーモードにしているから

携帯がブルブルと震えるだけで着信音は鳴らない。

先輩かな・・・？

そう思い、メールを開くと・・・

意外な人物からだった。

-
-
-
-

話したい事がある。

『Aruru』で待ってるから

仕事が終わったら来てほしい。

-
-
-
-

康成さんからだった。

話って・・・何？

今さらなんの話があるっていうの？

私は康成さんの話なんて聞くつもりも『Aruru』に行くつもりもなかった。

もちろん・・・その事を伝えようとメールを返すつもりもない。

それから、次の日もまた次の日も康成さんからメールが来た。

だけど私はそれでもメールを返さないでいた。

そして木曜日、仕事が終わって更衣室で着替えていると携帯が鳴った。

着信表示を見ると康成さんからだった。

出たほうがいいのかな？

月曜日からずっとメールしてきているし、

何かよっぽど重要な用なのかもしれない・・・。

思い切って出てみようと思い、携帯の通話ボタンを

押そうとした時、更衣室に佐伯さんが入ってきた。

私は思わず携帯の終了ボタンを押して電話を切った。

それを見た佐伯さんは無言で私を睨みつけた。

何なの一体・・・。

気分を害したまま更衣室を出て、帰宅しようとして会社を出ると
いきなり後ろから誰かに腕を掴まれた。

「っ!？」

誰っ？

振り向いて見ると、康成さんだった。

「ごめん・・・驚かせて。」

もしかして・・・待ち伏せしてた？

「話があるんだ。」

「……。」

私は、どうしようか迷った。

別に今さら康成さんの話を聞くつもりもないし、

聞いたところで何が変わるわけでもないだろう。

だけど、何度もメールが来て電話がかかって来て

こうして待ち伏せまでするという事は……

聞くだけでも聞いたほうがいいんだろうか？

それとも……

「康成さん。」

不意に康成さんの後ろから声がした。

康成さんはその声に振り向くと少し眉を顰めた。

……佐伯さんだった。

康成さんの手から力が抜け、私は掴まれていた腕を離して咄嗟に無言で踵を返した。

「・・・愛美っ！」

「康成さんっ。」

康成さんが私を追いかけてようとした瞬間、

佐伯さんがそれを制した。

後ろで二人の声が聞こえる。

ケンカしているみたいだ。

康成さんと佐伯さん・・・上手くいつてないのかな？

でも、婚約までしてるんだし・・・

・・・で、別に私が気にすることじゃないか。

翌日、金曜日。

いつもなら仕事が終わると先輩の部屋に行くんだけど、

今日は出張で先輩はいない。

明日の夜に帰ってくる予定だ。

だから私は自分のアパートに帰る事にした。

電車に乗って外の風景を眺めていると先輩のマンションが見えた。

・・・早く会いたいな・・・。

本当は先輩と毎日でも会いたい。

康成さんと付き合っていた時はそんな事思わなかったのに・・・。

でもそれは会社が同じだから顔だけでも見ようと思えば

見ることができたからかもしれないけど。

先輩、早く帰ってこないかなあ・・・。

明日何時に帰ってくるのかな？

アパートに着いて、2階にある自分の部屋へと

繋がっている階段をあがると人影が見えた。

黒っぽいスーツを着た長身の男性だ。

しかも、その男性は私の部屋の前にいる。

・・・誰？

私はゆっくりと男性に近づいた。

「・・・康成さん。」

私の部屋の前にいたのは康成さんだった。

「愛美。」

康成さんは私に気がつくど、立ち止まってしまった私に近づいてきた。

「どうしても話がしたくて……。」

……どうしても？

「愛美……もう一度、俺とやり直してくれないか……？」

……何を言っているの……？

「あいつ……嘘だったんだ……。」

・・・嘘？

「どづいっ・・・事？」

「千鶴のヤツ・・・妊娠なんてしていなかったんだ。」

「え・・・？」

それって・・・

「子供なんて出来てなかったんだよ。」

「アイツ・・・どうしても俺と結婚したいからって、

嘘ついてたんだ・・・。」

「・・・。」

「俺は、愛美と結婚するつもりだったのに・・・。」

「・・・でも・・・、佐伯さんとも付き合っていたのは、

事実・・・でしょ?。」

「二股かけてた事には変わりはない。」

「それは・・・っ!向こうから誘ってきたから・・・。」

「だからって・・・」

「愛美は知らないかもしれないけど・・・アイツ・・・、

うちの社長の娘なんだ。」

「えっ！？・・・で、でも・・・苗字が・・・」

「社長は数年前に離婚して千鶴は奥さんの方に引き取られたから、奥さんの旧姓を名乗ってるらしい。」

「・・・。」

「俺は今の会社に骨を埋めるつもりだったし、

一回だけのつもりだった・・・だけど・・・」

・・・何、それ・・・。

「・・・つまり・・・脅されてたって事？」

「ああ・・・。」

だとしても・・・

「アイツとは、婚約を解消して別れたよ。」

「え・・・。」

「子供ができたからって言われて仕方なく結婚するつもりでいたけど、

妊娠してないってわかった今・・・もう、アイツと一緒にいたいとは思わない。」

「そんな・・・」

「俺には愛美だけだ。」

今さらそんな事言われても・・・

「俺とやり直してくれ。」

「・・・無理よ。」

「・・・なぜ？」

なぜって・・・それは・・・

「俺がいるから。」

私は後ろから聞こえた声にハツとして振り返った。

「先輩っ!？」

・・・どうして・・・？

先輩は康成さんの前に来ると私を背中に隠し、

「今、ナルと付き合ってるのは俺だから。」

と、言い放った。

「・・・。」

康成さんは押し黙り、そしてしばらくの間、

先輩から視線を外さないでいた。

先輩の方も目を逸らそうとしない。

ピンと張り詰めた空気・・・どれくらいその緊迫した状態が続いたかはわからないけれど康成さんは私に視線を移した後、先輩と私の横を通り過ぎて行つた。

「ナル、大丈夫だった？」

康成さんの姿が見えなくなった後、先輩が心配そうな顔をして私の顔を覗き込んだ。

「は、はい。」

「何も・・・されてないよな？」

「だ、大丈夫です・・・て、先輩・・・なんでここにいますか

「？」

出張に行ってるんじゃない。。。。

「あー、仕事が予定より一日早く終わったから、

驚かせようと思って連絡しないで迎えに来たんだ。」

「そうだったんですか。」

「けど、逆にこっちが驚かされたな。

。。。。まさか、元彼がまだナルにちょっかい出してたなんて。」

「。。。。。」

「。。。。とにかく。。。。無事でよかった。。。。。」

「先輩、ありがとうございました。」

「彼氏なんだから当たり前だろ？」

先輩はプツと吹き出して私の頭を優しく撫でてくれた。

「しばらくは・・・俺のマンションにいた方がいいな。」

先輩の車でマンションに向かう途中、

少しの間、何かを考えているようだった先輩が

不意に口を開いた。

「どうしてですか？」

「あの様子じゃ、またナルの部屋に押しかけてくるぞ？」

「……………」

「……かと言って、俺がナルの部屋にしばらくいるとしても
帰りが遅いときもあるし。」

「で、でも……先輩……迷惑じゃないですか？」

「もっつ！何言っただよっ。」

「だ、だって……」

「自分の彼女を他の男から守るのに何が迷惑なんだよ？
それとも、ナルは元彼のトコに戻りたいのか？」

「そんなワケないじゃないですかっ。」

「んじゃ、おとなしく俺の言っ事を聞きなさい。」

「は、はい……。」

結局、私は先輩の言つとおりしばらく先輩のマンションで暮らすことになった。

そして、週が明けた月曜日。

朝一で私は部長に呼び出しを喰らった。

「ただいま。」

週明け、月曜日。

俺はいつもより早めに仕事を切り上げた。

少しでも早く帰ってナルの顔が見たかったからだ。

だけどドアを開けた瞬間、笑顔で出迎えてくれると

思っていたナルの姿はなく、シン・・・と静まり返った

暗い室内が視界に入ってきた。

・・・あれ？

「ナル・・・？」

リビングのドアを開けてナルの名前を呼んでも返事はなく、

おまけに部屋の中は真っ暗だ。

もしかして、もう寝たとか？

いやいや、まだ8時前だぞ？

それでも一応、具合でも悪くてベッドの中にいるのかと寝室を覗いてみた。

「・・・あれ？」

寝室にもいない。

・・・という事は・・・風呂か？

だけど音も聞こえないし、相変わらずどこも真っ暗なままだ。

まだ帰っていないのかな？

それとも、もしかして・・・いつもの癖でアパートに帰ってるのか？

だとすると・・・またあの男が来たらマズいな・・・。

俺は聊か不安になり、携帯を開いた。

ナルの携帯を鳴らしてみるけれど、なかなか出ない。

まさか・・・

本当にあの男が来てて、出るに出れないとか・・・？

そう思っていると、留守番電話に切り替わる寸前、

電話越しにナルの声が聞こえた。

『もしもし、先輩？』

「うん、俺。」

『ごめんなさい、なかなか出られなくて。』

「いや、それはいいんだけど・・・もしかして、まだ仕事してた？」

受話器の向こうから何やら騒がしい声がして、

それはすぐにまだ会社にいるんだとわかった。

『あ、はい。』

「あー、ごめん。それなら、いいんだ。」

『何か急ぎの用でした？』

「ん・・・じゃなくて、まだ帰ってなかったから、

まさかアパートに帰っててまた元彼に捕まってるのかと思って。」

『あ・・・ごめんなさい、心配かけて・・・』

「いや、そんな気にしないでいいよ。」

ナル・・・忙しそうだなあ。

なんかトラブルでもあったのかな？

いつもよりやや早口でしゃべっているナルの様子で

それは感じ取ることができた。

『あ、あの・・・それと先輩、私、今日はまだ帰れそうにないので

晩御飯は先に済ませちゃってください。』

「そっか・・・わかった。」

電話を切った後、俺はふとナルは晩メシはどうするのかと

聞いていない事に気がついた。

もう一回電話するのもなんだしなあ・・・

何時くらいになりそうだとも言ってなかったし、

同僚とついでに済ませて帰るかもしれないしなあ・・・。

・・・とりあえず野菜スープでも作るか。

スープなら遅くなってあまり食べる気がしなくても食べられるだろう。

それから俺は先に晩メシを済ませ、風呂に入った。

風呂から上がって時計を見ると、時間はすでに10時を回っていた。

ナル遅いな・・・。

会社まで迎えに行こうかどうかどうしようか・・・、

今から行ったとしてももう会社を出ていて行き違いになるかもしれない。

かといって、電話して聞くのもな……。

まだ仕事中心で事も有り得るし……。

さて、どーしたもんかと俺が考えていると玄関のドアが開く音がした。

「ただいまです。」

あ……帰ってきた。

「おかえり……。て、あれ？」

「よう。」

ナルの隣にはなぜか矢野もいた。

……？

「あ、先輩、遅くなったから矢野さんがわざわざ送ってくださったんですよ。」

「・・・それでー、せっかくなんで少し寄って行ってもらおうかと思つて。」

あ、なるほど。

「そつか、まあ上がれよ。」

「お邪魔します。」

「ナルと矢野はもうメシ食つたの?」

「いや、まだ。」

「まだですー!。」

「じゃあ、なんか作るから矢野も食つて行けよ。」

その後、送っていくから。」

こんな時間まで何も食べないでやってたのか。

「ん？ああ、そうだな。じゃあお言葉に甘えて。」

「ナルは先に着替えて来いよ。その間に作るから。」

「え？はい。」

「随分忙しかったみたいだけど、なんかあったのか？」

ナルが着替えを済ませ、リビングに戻ってきたところで俺は二人に聞いた。

「なんかあったどころの騒ぎじゃねえよー。」

矢野が疲れた様子で言った。

「あ、あのー・・・それがですねえ・・・」

ナルはなんだか何か言いづらそうに口を開いた。

「会社・・・クビになっちゃいました・・・。」

・・・え？

「それって・・・どういう事なんだよ？」

俺は交互に二人の顔を見た。

「俺にもさっぱりわからん。」

矢野はそう言うとお手上げ・・・と言った感じで
首を横に振った。

「ナル・・・なんかやったの？」

「い、いえ・・・何も・・・。」

「・・・じゃ・・・なんで？」

「・・・なんでナルが・・・？」

「あ……でも、だいたい察しはついてるので……」

「愛美ちゃん、心当たりあるの？」

「……はい。さっきまで忙しくて矢野さんにもまだお話してなかったんですけど、」

多分、康成さんと佐伯さんの事が原因じゃないかと……。」

「日高と佐伯さんが？」

「はい、康成さんと佐伯さん……なんだか上手くいってないみたいで……」

「それがなんで愛美ちゃんに関係あるの？」

「・・・それがですね・・・実は先週の月曜日からずっと2、3日続けて

康成さんからメールが来てたんです。」

「日高から？なんでまた？」

「話があるって・・・でも、私はもう康成さんの話を聞くつもりも会うつもりもなかったからずっと無視してたんですけど、

木曜日、会社の前で捕まっちゃって・・・で、その時に佐伯さんが現れて、康成さんとケンカになって・・・」

「・・・で、愛美ちゃんはどうしたの？」

「私はその場にいても二人の問題だから関係ないし、さっさと帰りました。そしたら金曜日の夜に今度はアパートで

康成さんに待ち伏せされてて・・・。」

「それで、愛美ちゃん大丈夫だったの？」

「はい、ちょうどその時、先輩が来てくれたので大丈夫でした。」

「そか・・・で、だから愛美ちゃん広瀬の部屋に帰るって言ったんだ？」

「はい。」

「じゃ・・・ナルにちょっかい出してたのは金曜日だけじゃなかったんだ？」

今の話の流れで行くと・・・“日高”と言う男がナルの元彼で、

“佐伯”って女がその浮気相手だったヤツか・・・。

「はい・・・無視してれば大丈夫だろうと思って

先輩には何も言わなかったんですけど・・・」

「そっか・・・で、その日高ってヤツはナルになんの話があったんだ？」

金曜日の夜、日高って男がナルに言い寄ってたのが目に入ってきて、俺は咄嗟に割って入ったけど、詳しい話までは知らない。

だいたいの予想はついてるけど・・・。

「それが・・・佐伯さん、子供ができたって言ってたの嘘だったらいいんです。」

「「えっ!?!」」

「康成さんとどうしても結婚したくて嘘ついたそうなんです。」

「「はあー?」「」

「……で、康成さんが佐伯さんと婚約解消して別れたから

やり直そうって……」

「日高も日高なら、佐伯さんも佐伯さんだな……。」

矢野は呆れた口調で呟いた。

まったくもってその通りだ。

「……けど、だったらなんでナルがクビになるんだ?」

「あ……っ！そうだよ？」

「それがですね……佐伯さんて実は、うちの社長のお嬢さんらしいんです。」

「え……でも、苗字違うじゃん？」

「私も康成さんから聞いただけなんですけど、数年前、社長が離婚した時に

佐伯さんは奥さんの方に引き取られたみたいで、

その奥さんの旧姓を名乗ってるそうなんです。」

「なるほどね……。」

「だから、今回の事はおそらく佐伯さんが手を回したんじゃないかと。」

「確かに・・・日高も来週から突然、北海道に転勤になったって辞令が出てたな。」

・・・だとすると、佐伯さんは日高を北海道に飛ばしただけじゃ気が済まず、

愛美ちゃんをクビにしたってワケか・・・。」

「はい・・・多分。」

それで今日、仕事の引継ぎなんかですつと遅くまでやってたのか・・・。

てか、日高ってヤツもあの女もナルと同じ会社だったのかよつ。

「それって・・・思いつきり不当解雇じゃないか？」

「ああ、そうだな。」

「あ……でも、もういいですよ。」

「「なんで？」」

「これでもう明日から康成さんと佐伯さんの顔見なくて済みますし。」

ナルは意外にもスッキリとした顔をしていた。

それでも俺は納得なんてしていないけど……。

もちろん矢野だって複雑な顔をしていた。

翌日、火曜日。

朝、俺が家を出る時間に合わせてナルが朝食を作ってくれた。

出勤する時も玄関でナルのおでこに軽くキスをして

「行ってくるよ。」って俺が言ったら、

につこり笑って「いってらっしゃい。」と見送ってくれた。

まるで新婚みてー。

俺は仕事をしながらにやけそうになる顔を抑えるのに苦労した。

ちよつと気を抜けばすぐに顔が緩みっぱなしになる気がしたからだ。

昨夜はナルの“突然クビ事件”に驚いたけど、

こんな生活が待っているなら、まんざらクビになったことも悪くないように思える。

別にこのままナルが働かなくても、ナル一人くらい十分食わせていける。

なんならいつその流れに乗って、プロポーズまでしようかとも

一瞬・・・いや、思いつき考えた。

だけど、それじゃきつとナルは納得しないだろう。

それに、ナルは「今日からまた大学時代に戻ったつもりで就活ですっ！」

と、両手で握り拳まで作って張り切っていたし・・・。

俺って・・・焦りすぎなのかな・・・？

それから数日後　　。

俺と今井先生、澄子ちゃんの三人はナルの会社・・・

もとい、元会社へ行った。

矢野との打ち合わせの為だ。

本当は昨日行っ予定だったけど、矢野曰く、

「愛美ちゃんがいなくなつて、営業部がうまくまわってなくて・・・」

・・・と、そんなワケで打ち合わせで使う資料やデータ、見積もりなんか

まったく準備できてなかったらしく今日になった。

もちろん、そんな事はあくまでそれは矢野の会社側の事情であつてビジネスとして俺達には関係はない。

だけど、とりあえず俺は矢野の望み通り予定をずらした。

コイツにはいろいろと“借り”もあることだし・・・。

ナルの元会社に着いて矢野を呼び出してもらう為、

受付に行くと“あの女”がいた。

ナルから日高つてヤツを奪い、そしてナルをクビにした張本人・・・

確か、佐伯とか言つたな。

「『今井建築事務所』の広瀬ですが、営業一課の矢野さんをお願いします。」

「・・・っ！？・・・はい、畏まりました。」

あちらでお待ちになっててください。」

佐伯は俺の顔を見ると、少し顔を引き攣らせたが、仕事で来たとわかるとすぐに作り笑顔で対応した。

ナルの仕返しに来たとも思ったのか・・・？

佐伯に案内され、俺達はミーティングルームに通された。

ガラス張りのその部屋からは営業部の様子がよく見える。

みんな慌しく動いていて忙しそうだ。

矢野は電話で話しながら、パソコンを操作して書類を書いている。

隣のデスクの上には書類が山積みになっているものの、

誰かが座っている様子もない。

離席という訳でもなさそうだ。

もしかして、あそこにナルが座っていたのかな？

あゝあゝ．．．ナルがクビになっていなければ、制服姿が拝めたのに．．．。

そんな事を思っていると電話を終え、受話器を置いて急ぎ足でやって来る

矢野の姿が目に入った。

「すみません、お待たせして．．．。」

矢野は少し疲れた様子でミーティングルームに入ってきた。

おいおい．．．まだ午前中なのにもう疲れてんのかよ．．．。

「では、始めましょうか。」

そう言ったわりに矢野はいろいろと資料を忘れていた。

頭の中がとっ散らかってんのか、途中で何度もデスクに資料を

取りに行き、バタついていた。

しかも見積書も数箇所間違っていたし・・・。

おかげで1時間で済むと思っていた打ち合わせは2時間もかかってしまった。

打ち合わせが終わると、ちょうど昼の12時だった。

矢野と俺達3人はついでに昼メシも一緒に食べる事になった。

「そっいえば今日、千秋さんは？」

ミーティングルームから見える営業一課のデスクに

ナルの姿がないのを今井先生は不審に思ったらしい。

「あ・・・ええつと・・・彼女は先日退職しまして・・・。」

矢野は少し言いづらそうに口を開いた。

「えっ！？辞めちゃったの？」

「・・・はい。」

「なんだ・・・それでここ2、3日、電話しても別の人が出てたのか。」

今井先生はよく営業一課に電話している。

ナルが辞める前は営業一課にかかってきた電話はほとんど

ナルがとっていたらしく、以前、俺達の接待に同席していたナルは明るくて愛想もいいから今井先生にもすっかり気に入られた。

だから今井先生とも仕事がらみだけどよく電話でしゃべっていた。

「もしかして・・・広瀬、結婚するのか？」

先生は俺に視線を向けるとにやりと笑った。

「ち、違いますよ。」

それならどんなにいいか・・・。

ちなみに先生は澄子ちゃんと俺の“強制デート”の一件で

俺の彼女がナルだという事をすでに知っている。

「なんだ・・・違うのか。」

「ついでに結婚すればいいじゃないか。」

俺の後ろにいた矢野が少し笑いながら言った。

「そつだよ。」

右隣にいる今井先生まで笑いながら横目で俺を見た。

俺だつてしたいよ……。

「俺だけその気でも……。」

「「お前、プロポーズ断られたのか？」」

今井先生と矢野は同時に同じ事を言った。

「いや……てゆーか……まだしてない……。」

「なんで？」

後ろを歩いていた矢野が俺の左隣に並んだ。

「なんでって・・・今、そんな話してもナルはまた就職する気満々だし・・・」

「愛美ちゃんはまだ仕事していたって？」

「いや、そんな事は言っていないけど・・・」

「んじゃ、なんだよ？」

「今、プロポーズなんかしたら退職したついでに言っただろ？」

「そんなの氣にしてたらいつまでたっても結婚できないぞ？」

右隣から少し呆れた声が聞こえた。

「お前は昔から詰めが甘いというか・・・後一歩が及ばないというか・・・」

左隣からもため息交じりの声が聞こえた。

俺ってそんなに煮え切らない男なんだろうか・・・？

それから数日間、俺はナルに結婚の話を切り出そうか

どうしようか迷っていた。

今井先生と矢野は結婚の話を出してナルの反応を伺ってみれば？

・・・なんて、軽く言っていたけど・・・

俺的には結婚話を持ち出してナルが無反応だったりなんかしたら

立ち直れるかどうか・・・。

まあ・・・でも、結婚の“け”の字くらい出してみるのも

いいかもしれない。

「ただいまー。」

「おかえりなさい。」

夜8時過ぎ、いつものように帰宅した俺をナルはいつものように笑顔で出迎えてくれた。

そして、いつものように温かいごはんを用意してくれている。

けど・・・一つだけ違う事があった。

それは、大きなバッグが寝室の隅に置かれている事。

その大きなバッグは2週間前、日高からナルを遠ざける為に俺の部屋に移って来る時にとりあえずの荷物を持って来た時のものだ。

なんでまたこのバッグがここに出してあるんだ？

ここに来てからずっとクローゼットに仕舞ってあったのに。

スーツから部屋着に着替え、キッチンに行くとナルは味噌汁を温めなおしていた。

「なあ、ナル・・・なんで、またあのバッグ出してんだ？」

「え？」

「ナルがここに移ってくる時に持ってきて来たヤツ。」

「あー、あれですかー。実は後で先輩に話そうと思ってたんです。」

「ん？何？」

「たいした事じゃないんですけど、

そろそろ自分のアパートに帰ろうと思って・・・」

「えっ!？」

おいっ。

十分、たいした事だろっ。

「康成さんも北海道に行った事ですし、さすがにもう私のアパートには

来ないと思うので。」

「ちょ……ナル……。」

「それにこれ以上、先輩に迷惑かけられませんからー。」

ナルはそう言いながら、笑顔で俺の目の前におかずを並べていった。

てか、迷惑って……。

「明日、お昼前にアパートに帰ります。」

「いや・・・ナル・・・あの・・・」

「あ、先輩、晩御飯ならちゃんと冷凍庫に入れて解凍だけすれば食べられるようにしておきますから心配しないで下さいね？」

「あ・・・と、その・・・」

「そうだった、スープも作っておきましょうか？」

「・・・いや、だから・・・その・・・」

「先輩、早く食べないと冷めちゃいますよ？」

「あ、うん……で、そんな事より……ナル。」

「はい？」

「あのさ……」

「あ……っ!？」

お……ようやく、俺の言いたい事に気付いてくれたか？

「お箸出してなかったですね。」

「……。」

「はい、先輩。」

ナルはにっこり笑って俺に箸を差し出した。

「あ、ありがとう……。」

俺は箸を受け取り、小さくため息をついた。

「……ナル、ホントに帰るつもりなのか？」

「はい。」

ナルは俺の目の前に座りながら即答した。

「……俺がずっとここにいて欲しいって言うても？」

「え……。」

「俺は、ナルにずっと居て欲しい。……ナルは……嫌？」

「そ、そんな事ないですつ。」

「じゃ、このままここに居て?」

「で、でも・・・迷惑じゃないですか?」

「なんで?」

「だって私まだ仕事見つけてないですし、ただの居候ですよ?」

「そんな事ないだろ?」

だって毎日朝と晩にちゃんとご飯を用意してくれるし、

洗濯だって掃除だって結局ナルに任せっきりになっている。

俺がしなくてもいいって言ってもきっちりやっちゃってるもんなあ・
・・。

これでナルが居候と言つなら世の中の主婦達全員居候だろ。

「迷惑だったら、ずっと居て欲しいなんて言わないよ。」

「は、はい……。」

「週末、ナルのアパートから本格的に荷物を移そう。」

一遍には出来なくても、今月いっぱいアパートを引き払えるだろうっ?」

「はい。」

俺はナルが少し嬉しそうに返事をしたのを見て、正直ホッとした。

焦る事はないのかもしれない……。

ここで焦って結婚話を口にしなくてもナルも俺と一緒に居たいと思
ってくれているなら・・・。

次の日から私は、先輩の部屋にいいよ本格的にパラサイトする事になった。

先輩は全然迷惑じゃないと言ってくれたけれど・・・でも、やっぱり、どこか気が引ける。

朝、6時。

私と先輩はまだ夢の中にいた。

しかし、けたたましい着信音に私と先輩は起こされた。

心地良い夢から現実へと引き戻したのは先輩の携帯だった。

「はい・・・もしもし?」

先輩は寝ているところを起こされたからか、不機嫌そうな声で電話に出た。

そしてベッドから出ると、私に気を使ってそのまま寝室を出てリビングの方へと行った。

しばらくして、寢室に戻ってきた先輩は少し焦った様子だった。

私がどうしたんですか？と聞くと、何やら仕事でトラブルが起きたらしく、

今からすぐに大阪に行くと言った。

「先輩、何泊するんですか？」

「んー・・・、多分3泊は確実かも。」

「あ・・・じゃ、着替えとか多めに入れておきますね。」

先輩が身支度している間、私は先輩の荷物を用意した。

「悪いな、ナル・・・こんな朝早くから支度まで手伝わせて。」

「気にしないで下さい。」

そう言つて私が先輩に笑顔を向けると先輩も「ありがとう。」

と、優しく笑つてくれた。

・・・ドキッ。

私は朝から先輩の笑顔にときめいていた。

大学の頃からずっと変わらない優しい笑顔。

あの頃はこの笑顔が見られる距離にいただけで幸せだった。

今は・・・もっと近く・・・

隣にいるけれど・・・。

「じゃ、行ってくる。」

先輩は玄関まで見送りに出た私に軽くキスをした。

「いつてらっしゃい。」

私は笑顔で送り出した・・・だけど・・・

本当はちょっと寂しかったりなんかする。

先輩と3日は確実に会えない・・・。

先輩の部屋に居候し始めてから、ずっと先輩と一緒にだった。

毎日、先輩を送り出して掃除して洗濯して、ご飯を作って。

それが当たり前になってきた。

でも、そろそろアパートに帰らなきゃ・・・と、思っていたら

先輩の口から予想外の言葉が出てきた。

“ずっと一緒にいたい……。”

その言葉がすごく嬉しかった。

今の私はただの居候でしかないけれど……

それでも先輩と一緒にいたいって言ってくれた事がすごく嬉しかった。

だから、余計に3日間も先輩と会えないと思うと寂しいんだよねー。

先輩を送り出してから私はお昼から派遣会社の登録会に行った。

会社をクビになって2週間……

ずっと就職活動をしているけれど、いまいち結果がふるわなかった。

途中採用で、しかも25歳というビミョーな年齢……。

面接で聞かれることはだいたいどこも同じ。

“今、恋人はいますか？”

“いる”と答えれば、年齢的にもすぐに結婚してもおかしくないと
思われ、

“いない”と答えてもそれはそれで腰掛け就職だと思われる。

そんなワケで未だに新しい仕事先は見つかっていなかった。

それで一応、“派遣”というのも視野に入れた。

登録会は思っていたより時間がかかった。

派遣会社の登録データ用の履歴書や職務経歴書を書いたり、

スキルチェックをしたり・・・

それが終わった後は派遣会社の担当者の人との面談。

どんな職種がいいか、勤務地はどの辺りがいいかとか。

制服は有った方がいいか、残業はどの程度までならできるのかなんていう

結構細かいことまで質問された。

「では、千秋さんをお願いできそうなお仕事がありましたら、すぐにご連絡いたします。」

「はい、よろしくお願いします。」

派遣会社を後にし、ため息をつきながら空を見上げると

薄っすらと雲が赤くなっていた。

もうこんな時間……。

今日は先輩もいないし、夕飯は冷蔵庫にある余り物で済ませちゃおうかなあ……。

……と、その前に、夜はきつと暇だからDVDでも借りて帰ろうかな。

そんな事を考えながら駅に向かって歩いていると、

「・・・千秋さん。」

と、不意に後ろから呼び止められた。

若い女性の声がした方を振り返ると

今井先生のお嬢さん・・・澄子さんだった。

「・・・あ・・・こんにちは。」

何か私に用なのかな？

不思議に思いながらも私はとりあえず笑みを返した。

「・・・あの・・・ちょっとお話が・・・」

「はい、なんでしょう?」

私に話があると言った澄子さんの顔はあまり余裕が感じられず、
愛想笑いすらしていない。

何か余程深刻な話なんだろうか・・・?

私と澄子さんは近くの静かな喫茶店に入った。

向かい合う形で座った澄子さんはしばらく経っても
なかなか話を切り出そうとしなかった。

まるで、何か言い難い事があるみたいに・・・。

少し緊張した空気が私と澄子さんの間に流れる中、
オーダーしたコーヒーをウェイトレスが持ってきた。
カチャン・・・と少しだけ音を立てて、

コーヒークップがテーブルに置かれた。

しかし、それすらも澄子さんの目には映っていないみたいだ。

そして、ウェイトレスが離れて行った後、

「あの・・・」

・・・と、ようやく口を開いた。

小さな声だけど意を決したようなその声に、私は少しビクリとした。

「広瀬さんと別れてください。」

・・・え？

彼女の口から出た言葉に私は耳を疑った。

「・・・。」

無言で瞠目している私に彼女はさらに続けた。

「広瀬さんを解放してあげて欲しいんです。」

解放・・・？

「それって・・・どういう・・・。」

「父は広瀬さんをとても気に入っています。」

行く行くは今井建築事務所を任せたいとも言っていました。」

確かに・・・今井先生は先輩の事をとても信頼しているみたいだし、
かわいがつてもいるようだけど・・・。

「私も将来、父の跡を継ぐつもりです。」

・・・広瀬さんと一緒に。」

それは・・・つまり・・・。

「・・・父は私と広瀬さんが結婚する事を望んでいます。」

「・・・。」

「でも、あなたが広瀬さんから離れない限り、無理なんです。」

・・・要するに私が・・・邪魔って事？

私が・・・先輩の足枷になっている・・・？

「・・・これは、広瀬さんの為に言ってる事なんです。」

「先輩の・・・？」

「はい。」

先輩の為・・・。

「千秋さんはこの先、広瀬さんを支えていける自信あるんですか？」

「それは・・・」

私はそんな事は考えたことなんてなかった。

ただ、一緒に居られるだけでいい・・・そう思っていた。

「私は支えていける自信があります。」

私なら将来、妻としてだけでなく建築士として同じ立場に立てますし。

それに・・・私には“建築士・今井龍哉”という後ろ盾もあります。」

私の目を真っ直ぐに見つめ、彼女はハッキリと言いつ放った。

「・・・。」

・・・私には・・・何もない・・・。

何も・・・。

何もないどころか今なんて失業中だし、

先輩の部屋に居候しているだけ。

むしろ私の方が先輩に支えてもらっている。

・ 「私と千秋さん……どちらが広瀬さんと結婚したほうがいいか……」

わかりますよね……?」

「私に……身を引け……と?」

「はい……、広瀬さんの事、本当に愛しているなら……」

わかってくれますよね?」

先輩を愛しているなら……。

「……。」

「広瀬さんの……なんです……。」

追い討ちをかけるように言った言葉に私は何も言い返せなかった。

先輩の為……。

私には先輩を支えられる程の力も後ろ盾もない……。

先輩が澄子さんと結婚すれば……

すべてうまくいく……。

……私が傍にいるより……きっと……。

「・・・わかりました。」

私は先輩が大阪から帰って来る前に部屋から出て行く事、

先輩の前から姿を消すことを彼女と約束をした。

これでいい・・・。

だって・・・私がこのまま先輩のそばにいても

多分、いつか先輩は・・・

先輩の部屋に戻り、私はすぐに寝室の隅に置いていたバッグを持って自分のアパートへ戻った。

元々、今日先輩の部屋を出るつもりで昨日、荷物をまとめて置いたバッグ。

その後、先輩にずっと居て欲しいと言われて元に戻そうとしていた。ただ、朝からバタバタしていた所為ですっかり忘れてそのままになっっていた。

まさか、それをそのまま持って帰る事になるなんて・・・。

私は自分の部屋に戻ってからもしばらく動けないでいた。

夜11時前。

シン・・・としている部屋の中、バッグに入れたままの携帯から先輩専用の着メロが鳴り響き、私は少しビクリとした。

先輩の声が聞きたい・・・。

でも、澄子さんと約束をしたから携帯に出るわけにいかない。

しばらく鳴って切れた後、バッグから携帯を出し、

先輩からの着信を拒否にした。

先輩と別れる・・・。

先輩の為に・・・。

その方がきつと先輩にとって一番いいから・・・。

私は自分に必死にそう言い聞かせた。

あー・・・疲れた・・・。

ホテルの部屋に戻った俺はすぐさまベッドに倒れこんだ。

今朝早くにいきなりトラブルが起きて大阪に来て

それからずっとろくにメシも食わずに仕事をしていた。

本当なら死ぬほど腹が減っているところだけど

脳みそまで疲れきっている所為か空腹なんてまったく感じていなかった。

油断したらなんかこのまま寝てしまいそうだけど、

その前にナルに電話、電話・・・。

ナルの声が聞きたい。

俺は携帯を手探りで出し、ナルの携帯へかけた。

数回コール音が聞こえ、なかなか出ないな・・・と思いつつ、
腕時計で時間を確認した。

11時前か・・・。

寝るにしては早いし、風呂にでも入っているのかもしれない。

まあ、後で折り返し掛けてくるだろう。

俺は携帯を閉じてナルからの電話を待つことにした。

1時間後。

もう一度ナルに電話をしてみたけれど、やっぱり出ない。

どこかに携帯放置してるのかな？

おやすみメールだけ送っておくか・・・。

俺は睡魔と闘いつつ、なんとか1時間粘って起きていたけれど

もう限界だった・・・。

重い瞼をこすりながらメールを打ってすぐに目を閉じた。

翌日、朝。

ホテルのモーニングコールに起こされ、目が覚めた俺は

そういえば大阪にいたんだ・・・と思い出し、

朝から気が沈んだ。

最近はずっとナルの声に起こされていたから余計だ・・・。

ナルからメール来てるかな？

ナルのモーニングコールが聞けないならせめてモーニングメール・

と、思った俺は携帯を開いてまたがっかりした。

ナルからはメールも着信もなかったからだ。

おかしいな・・・。

いつもなら返してくれるのに。

忘れてるのか、それともまだ寝てるのかもな・・・？

だってまだ7時30分だし。

しかし、それからずっとナルが電話に出る事はなかった。

折り返し掛け直してくる事もなかった。

メールもまったく返って来ない。

おかしい・・・。

最初はただタイミングが悪いただけだと思っていた。

けど、いくらなんでも電話はともかくメールくらい普通返すだろ？

だって、俺はナルの彼氏なんだし・・・。

・・・まあ、明日帰れることになったからいいけど。

トラブルはなんとか無事に4日で解決し、明日の朝東京に帰れることになった。

帰った後はそのままマンションに戻りたいところだけど

事務所に顔を出して先生に報告しなければならない。

あゝあ、・・・早くナルに会いたいな・・・。

たった3、4日離れているだけなのに俺はもう禁断症状が出そうだった。

大阪に来てからずっとナルの声も聞けてないから・・・というものもある。

そしてやっとの事でようやく仕事を片付け、東京に戻った俺は事務所に顔を出した。

先生との話を終え、マンションに帰ろうと席を立つと澄子ちゃんが話しかけてきた。

「広瀬さん、一緒にランチ行きませんか？」

時計を見ると12時を少し過ぎたところだった。

ランチに行くにはちょうどいい時間だけど、

俺は少しでも早くナルに会いたかった。

「あー、ごめん。今日はもう帰るから。」

「えー、じゃー、ランチ食べて帰るっていつのはどうですか?」

「いや・・・早く帰りたいし・・・」

「私、広瀬さんがパパと話し終わるの待ってたんですよー?」

澄子ちゃんて、言い出すとしつこいからなあ・・・。

「こら、澄子。」

どうしたものかと考えていると、今井先生が助けてくれた。

「広瀬は大阪から帰ったばかりで疲れてるんだぞ?」

「わかってるけどー……。」

「だったら、今日のところは勘弁してやれよ。」

それに広瀬だって早く帰って彼女の顔が見たいだろうし。な？」

先生は俺の顔をちらりと見た。

「……。」

ハイ、まったくもってその通り。

「……わかった。」

澄子ちゃんは先生に諭され、ムツとした表情で踵を返した。

それを見た先生は深いため息をつき、

「じゃ、広瀬。気をつけて帰れよ。」

と、言った。

先生・・・ありがとう。

先生のおかげで澄子ちゃんから解放された俺は
ようやくマンションに戻った。

「ただいまー・・・。」

シーン・・・。

あれ・・・？

ナル、いない？

「ナルー？」

リビングにもいない。

「ナル？」

寝室にもいない。

「ナルちゃん？」

風呂でもない・・・。

あとは・・・どこだ？

俺の書斎かな？

「ナルさん？」

あれ・・・いない。

じゃあ・・・後はもう一つの部屋？

てか、これだけ呼んでるのに出てこないって事は

やっぱいないのか。

買い物にでも行ってるのか、また面接にでも行っているのかもしれない。

・・・だけど、俺はなんだかものすごく嫌な予感がした。

数日前からずっと繋がらないままのナルの携帯。

いつもなら折り返し掛けてくるはずなのに

まったく掛かって来ない事やメールすらない事・・・。

それに・・・部屋の中をよく見ると

ナルが使っていた物が全てなくなっている。

俺は急いでナルのアパートに向かった。

「・・・そんな・・・どうして・・・。」

俺は愕然とした・・・。

ナルのアパートへ着いて合鍵でドアを開けてみると、

部屋はすでに蛻の殻だった・・・。

ガラん・・・とした部屋・・・。

この部屋だけまるで時間が止まったみたい

に静まり返っていた・・・。

そして自分の部屋に戻った俺は、会社から帰った時に

ポストから取り出した郵便物の束の中に、

他とは違う手紙があるのに気がついた。

“ 広瀬優二様 ” と書かれた封筒の文字は間違いなくナルの字だ。

消印は、俺が大阪に行った翌日の日付・・・。

俺は恐る恐る封筒を開けた。

その中には俺の部屋の鍵とたった一行だけの手紙。

“ 私の事は忘れてください。ごめんなさい。 ”

その言葉が何を意味するのか・・・

理解するにはそう時間はかからなかった。

ナルは俺の事が嫌いになったんだろうか・・・？

だから、俺が出張に行っている間に黙っていなくなったのか・・・？

・・・いや・・・違う・・・。

ナルはそんな事が平気でできるような子じゃない。

だけど・・・じゃあ、なぜ・・・？

何か原因があるにしてもさっぱりわからない・・・。

俺が大阪にいる間・・・何があっただんだ・・・？

それから数日経ってもナルの消息はまったく掴めなかった。

矢野にはもちろんの事、ナルの実家にも電話を試してみた。

だけど、ナルは実家にすら帰っていないし、連絡さえしていなかった。

実家に帰っていないとすれば・・・一体、どこに行ったんだ？

友達のところにも行っているんだろうか？

それとも・・・

まさか・・・

日高のところ・・・？

もし・・・日高のところなら・・・

やっぱりナルはアイツの事をまだ忘れていなかったって事なのか・・・？

もやもやした気持ちのままナルの事を考えながら仕事をしている所
為か、

ちっとも仕事が捗っていない。

それでここ数日はずっと残業をしている。

・・・RRRRR、RRRRR・・・

そして今日も定時をかなり過ぎるまで残業していると

矢野から携帯に電話がかかってきた。

会社にかけて来ていないという事は、

仕事の話じゃなく、プライベートな話・・・

・・・ナルの事かっ!?

「もしもしっ。」

『もしもし、矢野だけど。今いいか?』

「ああ。」

『愛美ちゃんの事なんだけど……。』

「何かわかったのか？」

『昨日、北海道支店に用があって電話した時にちょうど日高が出て、
ちょっと話したんだ。』

……で、俺ももしかしてと思って愛美ちゃんの事
聞いてみたんだけど……。』

「……。」

俺はごくりと息を呑んだ。

『……結論から言うと日高のところには行ってなかった。』

「そうか……。」

全身の力が一気に抜けていくのがわかった。

『実は日高も愛美ちゃんにずっと謝りたくて電話してたらしんだけどな。』

けど、まったく電話にも出ないし、メールも返って来ないからどうしたもんかと考えてたらしい。』

「謝りたかったって……？」

『まあ、あいつとしては自分の所為でクビになったようなもんだし、責任感じてるんだろ。』

それから、日高にも愛美ちゃんが行きそうなところ聞いてみたんだけど、

さっぱりわからんらしい。』

「そつか……。」

『そんなワケだから、愛美ちゃんが日高のところへ行っていないって事だけ

お前に伝えておこうと思ってな。

……また、何かわかったら連絡するから。』

「……ああ、……サンキュー。」

矢野との電話を終えた後、俺はため息をついた。

ナルが今さらアイツのところに戻るはずがないと思いながら、

一瞬でも疑った自分に腹が立った。

そして、日高のところへは行っていないとわかった時、

ホッとしたと同時にまたナルの消息がさっぱり見当がつかなくなっ
た。

それから一ヶ月。

俺はずっとナルを探し続けた。

大学時代のナルの友達や後輩、先輩・・・

ナルが行きそうな場所も思い当たる場所すべて・・・。

けど・・・

ナルはどこにもいなかった。

ナル・・・

どこへ行っただ・・・？

どこへ・・・

デスクの上で両肘を付き、指を組んだ上に額を乗せて目を瞑っていると

後ろから澄子ちゃんの声がした。

「広瀬さん。」

俺は態と返事をしなかった。

今は誰かと会話する気になれなかったからだ。

だけど澄子ちゃんは俺が“話しかけるなオーラ”を出しているのに

「広瀬さん？」と俺の顔を覗き込んできた。

「・・・何？」

ため息をつきながら、少し不機嫌そうに返事をした俺に

澄子ちゃんは一瞬、眉間に皺をよせた。

「あの・・・明日、ハウスメーカーの展示場が新しくオープンするらしいんですけど、

一緒に見に行きませんか？」

澄子ちゃんは“強制デート”の件があつてしばらくは先生の手前、おとなしくしていたけど、ここ最近また俺をあれやこれやと

休みの前の日になるといろいろ誘ってきていた。

だけど、俺はその度に断っていた。

ただでさえ、澄子ちゃんとあまり接触を持たないようにしていた。

それに、今はそれどころじゃない・・・。

澄子ちゃんに構っている暇があるならナルを捜したい・・・。

「ごめん・・・用事があるんだ。」

「・・・土曜日も日曜日もですか？」

“用事がある。”・・・そう言えば、だいたい「そうですか。」と言って、

諦めていた澄子ちゃんだけど、今日はなぜか食い下がってきた。

「うん・・・土曜日も日曜日も。」

「・・・彼女・・・ですか？」

「ああ・・・。」

多分、澄子ちゃんは“彼女とデート”なのか？と言う意味で聞いてきたんだと思う。

それは違うけれど“彼女”の事には違いない。

だから、俺は敢えて“そうだ。”と答えた。

だけど、そんな俺に澄子ちゃんは意外な言葉を口にした。

「千秋さん・・・まだ広瀬さんと付き合ってるんですか・・・?」

その言葉の意味がまったくわからなかった。

「千秋さん・・・もういないんですよね・・・?」

え・・・?

「・・・?」

“もういない”・・・澄子ちゃんはナルがいなくなった事を知ってるのか?

「・・・。」

黙り込んだ澄子ちゃんは俺から少し視線を外し、俯いた。

「ナルがいなくなったの・・・どうして知ってるの？」

「・・・パパがそう言ってたから。」

俯いたまま澄子ちゃんは小さな声で答えた。

嘘だ・・・。

ナルがいなくなった事を知っているのは・・・

矢野と智子ちゃん・・・そして・・・日高・・・。

後はナルの家族だけ・・・。

俺は社内の誰にもナルがいなくなった事を話していなかった。

「最近、元気ないね。どうしたの？」と聞かれても

誰にも話していない・・・。

澄子ちゃんにも・・・先生にも・・・。

「俺・・・先生にその事話してないけど・・・？」

「え・・・？」

澄子ちゃんはハッと顔を上げた。

「澄子ちゃん・・・なんで知ってるの？」

俺は澄子ちゃんは顔を真っ直ぐに見つめた。

「・・・。」

澄子ちゃんは俺と目が合うと咄嗟に視線を外し、

また黙り込んだ。

「・・・何か・・・知ってるの・・・？」

澄子ちゃんが知らないはずの事を知っている・・・。

だとしたら・・・俺が知らない“何か”を澄子ちゃんは知っている・・・？

「・・・。」

相変わらず黙ったままの澄子ちゃんはキュツと唇を噛んだ。

そして、居た堪れなくなつた彼女は踵を返し、事務所を出て行こうとした。

だけど・・・そうはさせない・・・っ！

俺は立ち上がって、澄子ちゃんの手首を掴んだ。

「っ！？」

驚いた顔で振り向いた澄子ちゃんの目には涙が滲んでいた。

「ごめんなさい……。」

しばらくの沈黙の後、澄子ちゃんはその言葉の後に

俺が大阪に行っている間にナルに会ったこと、

ナルに俺と別れるように言った事、

ナルに何を言ったのかをすべて話した。

そして、俺がナルから離れるのを待っていた事。

だから、わざわざ俺が出張に行っている日にナルに近づいた事。

……なんてことだ……。

「なんで……そんな事……。」

俺は手で顔を覆いながら頂垂れた。

「・・・好きなんです・・・」

「・・・。」

澄子ちゃんの口から出た言葉の意味はなんとなくわかっていた。

「私・・・広瀬さんの事が好きです。」

澄子ちゃんは俺の顔を真っ直ぐに見つめ、ハッキリと言った。

だからって・・・

俺は目を合わさないでいた。

「千秋さんなんか広瀬さんを取られなくなかった・・・。」

“なんか”・・・って・・・

「千秋さんと再会するまでは、広瀬さん私のお願いも全部なんでも聞いてくれたのに・・・」

でも、千秋さんが広瀬さんの前に現れてから急に・・・
広瀬さん、私に冷たくなった・・・。」

それは・・・違う・・・。

「千秋さんがいなくなれば・・・」

「それは違うよっ!」

俺の少し大きな声に澄子ちゃんはビクツとした。

「それは違うよ・・・俺は・・・ずっとナルの事忘れていなかった。
大学の頃からずっとナルが好きだった・・・。」

「・・・。」

・・・RRRRR、RRRRR・・・

重苦しい沈黙の中、俺の携帯の着信音が鳴り響いた。

着信表示を見ると矢野からだった。

もしかしたら・・・ナルの事かもしれない・・・。

「出ないで・・・。」

着信音にかき消されそうなほど小さな声で澄子ちゃんが言った。

だけど・・・

もし、ナルの事だったら一刻でも早く知りたい・・・。

「もしもし・・・。」

携帯に出た俺の顔を澄子ちゃんは悲しそうな顔で見つめていた。

『もしもし、俺だ。』

矢野は少し急いでいる様子の声で話し始めた。

『愛美ちゃんの居場所がわかったぞ。』

「っ!?!・・・ホントか?」

『ああ・・・さっき日高から電話があった。』

「日高から・・・?」

その言葉に俺は思わず息を呑んだ。

日高が・・・なぜ・・・?

『今日の昼間に日高が出張先で見かけたらしい。』

「・・・どこなんだ？」

『沖縄だ。』

「沖縄？」

『ああ、少し遠目からだったけどおそらくまちがいないだろうって
言ってた。』

日高も声を掛けようとしたみたいなんだが、仕事中で無理だった
らしい。

どの辺りで見かけたか詳しい事聞いたから・・・書くものあるか
？』

「あ、ああ・・・。」

俺はデスクのメモ用紙に矢野から聞いた情報を書き写した。

電話を切った後、俺は俯いたままの澄子ちゃんに言った。

「澄子ちゃんの頼みを聞いてたのは先生に言われてたからだよ。」

「パパが・・・？」

「うん・・・だから、例えナルと再会していなくても・・・」

俺は澄子ちゃんの気持ちに伝える事は出来なかった。」

「・・・。」

「ごめん・・・。」

澄子ちゃんの気持ちは前々から気付いていた。

あれだけ積極的にアプローチされればいくら鈍感な俺だってわかる。

「俺・・・ナルじゃないと駄目なんだ。」

それだけ言って、澄子ちゃんの横を通り過ぎ、

俺は事務所を後にした。

翌日。

俺は朝一で沖縄行きの飛行機に乗った。

2時間半の道のりがやけに長く感じる。

那覇空港に着き、昨日、日高がナルを見かけたという
場所までタクシーで向かった。

・・・ナル・・・

・・・どうか・・・間違いじゃありませんように・・・！

俺は祈るような思いでいっぱいだった。

日高がナルを見かけたという場所は那覇空港からは
距離的にそう遠くはない場所だった。

だけど・・・俺はその場所に降り立った瞬間、

絶対にナルがいると確信した。

なぜなら・・・

・・・そこは大学時代、野球部の合宿で訪れた場所・・・

そして・・・

俺にとって忘れられないナルとの思い出の場所だった・・・。

ナルがもし本当にここにいるならどこか近くに泊まっているはずだ。

まずは虱潰しに当たって行くか。

いや・・・それよりも・・・

ナルも大学時代の事を思い出してここに来ているなら・・・

多分、あの合宿の時と同じ所に泊まっているはずだ。

だとしたら・・・

あそこか・・・っ！

俺は合宿の時と同じ旅館を探した。

名前までは憶えていなかったけれど、

外観と当時の記憶を辿っていけば

そう難しいことではなかった。

そしてその旅館はすぐに見つかった。

旅館のフロントでナルの事を聞くと

まさしく泊まっているという予想通りの答えが返ってきた。

やっぱり・・・ここだったか。

ナルはここに泊まっていて、いつも海を見に出かけているらしい。

旅館の近くには海があって潮の香りがしていた。

そういえば・・・4年前、初めてここに来たときもナルは

綺麗な碧い海に感動して大はしゃぎしてたっけ・・・。

目の前に広がる碧い海は4年前のあの時と変わっていなかった。

ナル・・・いるかな・・・？

どこまでも続いていそうな白い砂浜には休日だからか

カップルや家族連れが何組かいた。

その中をナルを探しながら歩いていると、

少し遠くの方に一人で座って海を眺めている女性の姿が目に入った。

ナル・・・？

一歩一歩近づくにつれ、段々顔がはつきり見えてきた。

いた・・・。

やっぱり、ナルだ・・・。

「・・・ナルッ！」

まだ少しはなれた距離にいるナルに思わず声をかけた。

よく考えれば、そんな事をすればナルが逃げ出すのはわかりきっている事で。

案の定、ナルは驚いた顔で俺の姿を認めるとすぐに立ち上がって走り出してしまった。

「ナルッ！」

俺はすぐにナルを追いかけた。

ナルは結構、足が速い。

それは大学の頃からわかっていただけだ

この間の澄子ちゃんとの“強制デート事件”の時に

俺のマンションから走り去るナルの逃げ足の速さに

再認識した。

だけど、ここは砂浜。

ナルはあまりスピードが出ていない。

そして段々と縮まるナルとの距離。

あと少し・・・

あともう少しでナルに手が届く・・・っ！

「あ・・・っ!？」

俺が手を伸ばした瞬間、ナルは砂浜に足を獲られた。

「ナルッ！大丈夫かっ!？」

座り込んでしまったナルの前に廻り込むと

肩で息をしながら俺とは目を合わさないようにナルは俯いた。

「ナル……。」

「……先輩……どうして……ここにいるんですか……？」

「どうしてって……そんなの決まってるだろ？ナルを迎えに来た。」

「……え……？」

ナルは少し驚いた表情でゆっくりと顔をあげた。

俺が迎えに来たのがそんなに意外か……？

「ナル……どうして黙っていなくなっただよ……？」

澄子ちゃんに俺と別れてくれと言われたのが原因なのはわかっていた……。

だけど……“どうして？”と聞いたのはナルの口から

はつきりと聞きたかったから。

“俺を嫌いになったワケじゃない”と言う言葉が・・・。

「・・・。」

ナルは澄子ちゃんとの一件を俺が知らないと思っているのか
黙り込んでしまった。

「澄子ちゃんに“俺と別れてくれ”って言われたから？」

「っ!？」

「昨日・・・澄子ちゃんから全部聞いたよ。」

「・・・。」

「ちょっとした会話をしてて、澄子ちゃんがボ口を出して・・・

それで問い詰めたら全部、白状したよ。」

「・・・。」

それでもまだ黙ったままのナル・・・。

「・・・それとも・・・ナルは俺の事が嫌いになった・・・？」

“違う”と、言うのはわかっている・・・でも・・・

「・・・。」

ナルは無言で首を横に振った後・・・静かに涙を流し始めた・・・。

俺はナルが“違う”と首を振ったことにホッとして、肩を抱き寄せた。

「俺はアイツとは違うよ……。」

先輩はそう言って私を抱きしめた腕の力を強くした……。

“俺はアイツとは違うよ……。”

先輩はわかってくれていたの……？

澄子さんから先輩と別れてと言われた時……

もしも……このまま私と先輩が付き合っていたとしても

康成さんが佐伯さんを選んだように仕事の為に私を捨てて、

澄子さんを選ぶんじゃないかって思った……。

だから……私は……。

何れ先輩が私から離れていくような気がして怖かった・・・。

それから先輩は私が泣き止むまで

ずっと抱きしめていてくれた。

もう、先輩とは会えない・・・

そう思っていた・・・。

それが今、こうしてわざわざ私を迎えに来てくれた・・・。

そして、先輩は私の気持ちをわかってくれていた・・・。

それなのに・・・私は・・・。

「・・・先輩・・・ごめんなさい・・・。」

ようやく涙が止まった私がそう言うと

「もう・・・バカだな・・・。」

と、先輩は私の頭を優しく撫でながら微笑んだ。

「・・・ごめんなさい・・・。」

「ホントに・・・バカだな・・・。」

「ごめんなさい・・・。」

「ホントにバカだよ・・・こんなにナルの事、
不安にさせてたなんて・・・。」

「え・・・？」

「こんな事になるなら・・・もつと早く

結婚したいって言えばよかった・・・。」

・・・先輩・・・？

「同棲するのも・・・もつと前から考えてた・・・。

ナルと結婚もしたいって・・・ずっと思ってた・・・。」

「・・・っ！」

「・・・けど、突然ナルがクビになって・・・そんな時に言ったら、

なんかついみたいな感じでナルが嫌がるかな・・・と思って

言わなかったんだ・・・。」

・・・先輩・・・そこまで考えてくれたの・・・？

「ナル・・・俺と結婚してほしい。」

「・・・先輩・・・。」

息が止まりそうだった・・・。

ずっと・・・ずっと・・・一緒にいたいと思っていた人からの
思いも寄らなかった言葉・・・。

・・・でも・・・

「・・・でも、先輩・・・澄子さんは・・・？」

「そんなの気にする必要はないよ。」

先輩は私の不安を一蹴するようにキツパリと言った。

「そもそも俺は、行く行くは独立するつもりだし、

『今井建築事務所』を継ぐつもりなんてない。

それに今井先生は本来、公私混同するような人じゃない。

だから、俺が誰と付き合いおうが結婚しようが

それに対して何か言って来る事なんて有り得ないよ。」

「そ、そうなんですか・・・？」

「ああ・・・むしろ今井先生は俺に早くナルと結婚しろって

言ってるぐらいなんだから・・・。」

先輩はそう言つと少し顔を赤くした。

「・・・だから、先生が俺と澄子ちゃんを結婚させたがってるなんて

嘘だよ。・・・澄子ちゃんのでまかせ。」

でまかせ・・・。

私、まんまとそれに騙されたのー？

「・・・で・・・、返事は・・・？」

「・・・へ？」

「いや・・・さっきの・・・」

「あ・・・。」

“さっきの”・・・って、プロポーズの返事って事だよね・・・？

「あ、あの・・・ホントに私でいいんですか・・・？」

「俺的には“ナルでいい”じゃなくて・・・“ナルじゃなきゃダメ”なんだ。」

ストレートなその言葉に胸がキュン・・・となった。

「・・・よ、よろしくお願いします・・・。」

抱きしめられたまま心臓がバクバクいつてるのを

なんとか悟られないようにしながら言った。

「・・・よかった・・・断られたらどうしようかと思った・・・。」

先輩はハアーツと息を吐き出しながら私の肩に顔を埋めた。

断る訳・・・ないのに・・・。

「ナル・・・帰ろう。」

「はい。」

柔らかい笑みで私を見つめて言った先輩に私も笑って答えた。

だけど、先輩と一緒に立ち上がろうとした瞬間、

右足首に激痛が走った。

「痛っ！」

「ナルッ？」

再び、砂浜に座り込みそうになった私の体を先輩が支えてくれた。

「足・・・捻った？」

「そう・・・みたいです・・・。」

さつき砂に足を捕られた時に捻ったみたいだ。

「これじゃあ、ちょっと歩くのは無理だな。」

先輩はそう言つと私に背中を向けてしゃがんだ。

「ナル、おんぶ。」

「えっ!?!・・・で、でも・・・。」

「その足じゃ歩けないだろ? ほら、早くっ。」

「あ・・・は、はい・・・。」

私は仕方なく、先輩の首に腕を回し、

背中に寄りかかった。

仕方なく・・・とは言うものの、実はものすごく嬉しかった・・・。

「なあ、ナル・・・憶えてる・・・？」

4年前、ここで合宿した時も俺がナルをおぶって

旅館まで帰った時の事。」

「はい、憶えてますよ。」

「あの時もナル、砂浜で転んで足を挫いたんだっただよな？」

「あはは、そうでしたねー。」

「あの時・・・実は俺、ものすごくドキドキしてたんだぞ？」

「どうしてですかー？」

「そりゃ、好きな女の子をおぶってるって言うのもあったけど、

・・・もう一つ・・・別の理由で。」

「なんですか？」

「ナルの胸が俺の背中に当たってたから。」

俺が笑いながらそう言つとナルは急に暴れだした。

「えっ！？・・・や、やだっ！？先輩っ。」

お、降ります！降ります！降ろしてくださいっ！」

俺がナルの方に振り向くと顔を真っ赤にして

ポカポカと俺の背中を叩いた。

「こらっ、ナル、そんなに暴れると落っこちるぞっ。」

「だ、だって・・・先輩が変な事言うから・・・」

「変な事って・・・」

「・・・。」

ナルは真っ赤な顔をしたまま黙り込んだ。

「あの頃ならともかく・・・今は身も心も俺のモンなんだから、
そんなに恥ずかしがることないだろうー？」

俺は態と軽い口調で笑いながら言ってみた。

すると、ナルは「そ、そうですねー・・・。」と言いながら

俺の背中に顔を埋めた。

それから、俺とナルは旅館まで無言で帰った。

一言も会話はなかったけど、それは決して気まずい雰囲気じゃなく、ただ・・・

言葉なんていらない・・・

そう思った・・・。

翌日。

約一ヶ月ぶりに東京へと戻ってきたナルを待っていたのは智子ちゃんの説教だった。

約小一時間、懇々と説教する智子ちゃんに俺と矢野で

「まあまあ、そろそろそのくらいで・・・」と

やっとのことで宥めつかせ、久しぶりに4人で食事をする事になっ

た。

「あー、そうだ、愛美ちゃん。一ついい知らせがあるんだ。」

智子ちゃんの説教がようやく終り、落ち着くのを待っていたかのよう
うに

矢野が口を開いた。

「・・・？、なんですか？」

「愛美ちゃんの“クビ”が取り消しになったんだ。」

「「えっ！？」」

矢野の口から出た“いい知らせ”は思ってみなかつた事だった。

俺とナルは同時に声をあげ、顔を見合わせた。

「それって・・・ホントなんですか？」

「ああ、そのかわり社長が解任になって、佐伯さんも辞めたよ。」

「え・・・ど、どうしてですか・・・？」

これはまた・・・どえらい展開だ・・・。

「先週の金曜日に社長の使い込みが発覚して役員会が開かれたんだ。

その時に社長の解任が決まって・・・で、佐伯さんも

社長のコネで入ったってのもあったし、居辛くなるって

予想できたのか、その日のうちに辞めたよ。」

「・・・そうですか・・・それにしても使い込みって・・・。」

「経理の奴らは前々からおかしいって思ってたらしくて

密かに上層部と一緒に探ってたらしいんだ。

それに加えて今回の愛美ちゃんの不当解雇と日高の

突然の人事異動・・・だろ？

いよいよ人事部も動き始めて徹底調査になったってワケ。」

「ド、ドラマみたいですね・・・。」

確かにドラマのような展開・・・だな。

「ははは、ホント、まさか自分の会社でこんな絵に

描いた様な事が起こると思っても見なかったけどな。」

矢野はゲラゲラと笑い飛ばした。

・・・ん？

という事は・・・

「・・・それじゃあ、日高も戻ってくるのか？」

ナルのクビが取り消しになったなら当然、日高の異動もなくなるだろう。

「あー、その事なんだけど・・・確かに日高の異動も

不当なものだって事になってアイツもこっちに戻る予定だったんだけど

北海道に残るって言い出したんだ。」

「なんでまた？」

「北海道支店でさ、他の支店よりも経理システムとか伝票処理だと

かが

ものすごく遅れてるんだよ。

んで、日高が北海道支店のシステムをまともなものにして、

それから改めて辞令が出たら戻るって言ってるさ。」

「ふーん……。」

「……康成さんらしいですね。」

ナルがクスリと笑いながら言った。

“康成さんらしい。”

その言葉は日高の事をよく知っていないと出ない言葉だ。

そついうのを聞くとなんとなく“日高の元カノ”部分が垣間見えた。

半年後。

俺とナルは今、離れて暮らしている。

・・・というと、「別れたのかよっ!？」と思われそうだが、

実は結婚が決まって“千秋愛美”から“広瀬愛美”に変わる前に家族で過ごす為に結婚式の一週間前からナルは実家に戻っていた。

そして一週間後の今日。

俺は結婚式場の新郎控え室で式が始まるのを待っていた。

・・・コンコン。

ドアをノックする音がして「はい。」と返事をしながら

もしかしてナルかな?なんて思っていると、

ドアを開けて入ってきたのは俺達の結婚式を

取り仕切る式場の男性だった。

「そろそろお時間となりましたので、こちらの方へどうぞ。」

「はい。」

もうすぐ・・・

もうすぐ、ナルに会える。

ナルが実家に戻っていた一週間、俺は新婚旅行に行くために

なるべく仕事を片付けていこうと連日遅くまで残業をしていた。

だからナルとは会えなかったし、電話もほとんどできなかった。

一週間ぶりの再会だ。

世話系の男性に案内されてチャペルに入ると

俺の親族とナルの親族、それにたくさんの列席者がすでに顔を揃えていた。

その中には矢野と智子ちゃんのカップル、今井先生もいる。

澄子ちゃんは・・・

さすがに呼ぶ気にはなれなかった。

ちなみに澄子ちゃんはその後、今井建築事務所を辞めた。

・・・いや、“辞めさせられた”と言ったほうが正しいだろう。

というのは、あの一件が今井先生の耳に入り、

怒り狂った先生が事務所を辞めさせたのだ。

元々、先生は自分の事務所に入る事に反対していた。

身内だという事で甘えが出てしまうから。

だけど澄子ちゃんがどうしてもというので仕方なく

公私混同をする事のない先生だけど、

浚々、事務所に入れたらしい。

そんな訳で澄子ちゃんは今、別の建築事務所に預けられている。

チャペルの中がシン・・・と静まり返り、

聖歌隊が歌い始めると同時に入口の大きな扉が開けられ、

二人のシルエットが映し出された。

そのシルエットは静かにゆっくりとバージンロードの上を歩いて

俺の方へと近づいてきた。

段々と・・・

少しずつ、シルエットからはっきりとした姿に変わる。

お義父さんにエスコートされて近づいてくるナル……。

純白のウェディングドレスに身を包んで少し俯いている。

あまりに綺麗なナルのドレス姿に俺は思わず息が止まりそうになった。

ウェディングドレスはナルと智子ちゃんの二人で選んだ。

俺も一緒に選びに行くと、「当日の楽しみが減るからダメですつ。」

と、ナルと智子ちゃんに言われ、矢野にも

「たまには男同士でデートしようぜ。」

と、気持ちの悪い事を言われながら

結局、どんなドレスにしたのかさえ教えてくれなかった。

肩のあたりまである髪をアップにして頭にはティアラとベール。

そして、ブルースターのブーケ。

サテンとレースのキャミソールのAラインドレスで

トレーンの部分にもレースが使われている。

可愛いけど、シンプルで甘すぎず、ナルらしいな・・・と思った。

俺のすぐ目の前まで来たナルは、お義父さんの腕を離れ

俺の左腕に手を回した。

少し恥ずかしそうに微笑みながら俺を見上げたナルは

本当に綺麗だった・・・。

ナルと結婚できるなんて・・・4年前は思っても見なかった・・・。

だけど・・・

今日・・・

ナルは俺の“妻”になった。

結婚式が終わった夜。

俺達は式場のすぐ隣にあるホテルに泊まることになっていた。

明日はここから新婚旅行に出かける。

披露宴のお色直しで淡いピンクのドレスに着替えたナルと俺は

そのままチェックインした。

部屋はちよつと豪華にスイートルーム。

「先輩、コーヒー淹れましょうか？」

部屋に入り、ソファアに腰掛けた俺にナルが言った。

「うん。」

ナルも疲れてるんじゃないのかな？・・・と、思いながら
つい、甘えてしまう。

・・・で、ゆーか・・・

俺には一つ、気になっている事があった。

ものすごく気になっている事・・・

それは・・・

「はい、先輩。」

熱いコーヒーを持ってきてくれたナルはそのまま

俺の隣に腰をおろした。

「ナル。」

俺はコーヒーに手をつけるよりも先にナルの腰を引き寄せた。

- Epilogue -

「・・・先輩っ!？」

私は、いきなり先輩に引き寄せられて驚いた。

「ナル・・・あのさ・・・。」

「は、はい・・・?」

「これから、ナルと二人でやっていく前に・・・
言っておきたいことがあるんだ。」

「はい・・・。」

せ、先輩・・・

もしかして・・・

関白宣言「ーーーーっ!?(by・さだまさし)

「俺達・・・今日、結婚したよな・・・?」

「はい。」

私と先輩の左の薬指には真新しい結婚指輪が光っている。

それがなによりの証拠。

「ナルは俺の奥さんになったワケだろ?」

「はい。」

そして、先輩は私の旦那様。

「そこでだ……。」

「はい。」

「……なにか……気が付かない……？」

「へ……？」

「なにか……って……？」

「何……？」

「いや……だから……。」

「なん、ですか……？」

「あの・・・ほら、俺とナルはもう夫婦なんだから・・・」

「はい。」

「その・・・自分の旦那さんの事を“先輩”って呼ぶのはおかしくね？」

「・・・あ。」

そういえば・・・確かにそれはおかしいかも・・・。

「いつになったら名前で呼んでくれるのかと思ってたら・・・」

「い、ごめんなさい・・・つい・・・。」

「日高の事はあっさり名前で呼んでたのに・・・。」

「え・・・いや、だって・・・康成さんは

大学の先輩とかじゃなかったからー・・・」

「じゃ、ナルの中では俺はまだ“大学の先輩”のままなの？」

「今はそれだけじゃないですよー？」

「でも、俺まだ一度もナルに名前でもらった事ないけど？」

先輩はちよつと拗ねた感じで口を尖らせながら言った。

「先輩・・・もしかして・・・結構、気にしてました？」

「うん・・・まあ・・・。」

「う、うめんなさい・・・。」

「まあ、付き合い始めた時に言わなかった俺も俺なんだけど・・・。」

「いえ・・・私も付き合い始めた時に名前で呼んだほうがいいのかなと

思ったんですけど・・・なんか恥ずかしくて・・・タイミングを

失っちゃって・・・」「ごめんなさい・・・。」

「じゃあ・・・これから名前ではね？」

「はい。」

それから・・・私が先輩の事をすんなりと“優二さん”と

呼べるようになったのは約一ヶ月後の事だった・・・。

・ E p i l o g u e ・ (後書き)

お陰様で無事完結致しました。

長い間、応援ありがとうございました！

これからも他の作品共々よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032e/>

ブルースター

2010年10月8日21時41分発行